

康定家
卿泳珍

拾遺墨草

完

拾遺愚草

詠百首和哥

印光 卷之二年四月

春二十首

侍従

江の見むかへえ四方の風もきよや春はとらす
わく霞くわくわく小春くはまや冬れどさり月く
寫ひのいほとまくにぞれてもけまゆ千代の匂
雪の内よ、そぞぞぞとよてよれ、空りくわく
梅花木もとをよてよれ、空りくわく空よあけひ
中く四方ふすへり梅花すつねもすと無よあく
春雨のしゆく室ふ風よきハ雲とよふとかくわく
まゐるゑくよしはよじつ庭ふねうりて青柳のい
吉野よたきのさくされそそ色だらまち三林のさく雲
花よ小春はれせんわくわくなまよまよまよ
行へ人よせやまく花すまにまくは思ふたけひ
あけまう春はくわくとよまう花はましめたよも
すと薫そがる木よとよさく花へよとだりき見くは
又やくよてよきくわくよくわくとわくねくわく
中くふ不くしきめりくわくとるくくわくとくわく
風くよてふとくわくとくわくとくわくとくわく
春の野よとよくこまハ雪とのうかく花よくやく
みれに花やうらん吉野山にとひとくとくなきはく
とよきて春はくわくやうらん白妙よとよ四房のやく
うくえとよくいとよく春のわくはくとくとく
だらむれ花うちくわくわくはくわくわく

夏十首

おじとふだりへきたとく花はくわくはくわく舞
却花よとよく先とくとくせて月よかくみ玉川を望む
まみとくりとくとくとくとくとくとくとくとくとく
だらむれ花うちくわくわくはくわくわく

立月や三ヶ月の山の事すがのうなむ林やるれんり
もれのうとうえはまくはれにゆ方へ人をまつ
め月に今日とくわめ明香川へとづらせやがりとん
見えられ水をこまちはこそ草花へかくてのわらみれ
樹河やれれ林よすきへとへゑれれもすりりと
えの月ひつじ道とまくとねのわらみす秋をまく

卷二十一

冬十首

高方室をもすわせしる寫生の葉のさうへ
冬色を一更二更と玉され葉しきの霜ひきしらせ見
はくは山のあくに冬れくるとあくらむ
五色ともがくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
地あやめりてうるわすれすれすれすれすれすれすれす
きうりふくの濱の浦風の空もまろ在明の月
よだすわれわらざくも無くもみゆくとみゆくと
よどく道とよどく雪中とよどくとたゆり冬れ堂
花とまつ月とれじとすがまと雪とせば年年と
けくがけいの水いたかくわしい年れまく

藏本二
卷

やせん神の主はおれがおもむくおもむくおもむく
えんやまへ空へもうすむ志すむじ思へりしりく風ふりよ
ゆうじんへ先を石へくらうし、おおきのとし方をくらうぢ
りうらへ此吉野の山へ身へるへまく見な無すまほねが
いだてひづかせんとがくし、いりよてのとし金をさ
目少くでますくわ地のけみよひいつすかわくわく神
身のうちにかわくたゞく面貌とこくせよそ思わせん
すまく浦のあらりよすか思ふ志やくまく谷ひそ
わいきうまゆみれきうつまくせん思ふせとまくよ
千束またたけの錦木にあそく南名を流
えゆくをするは世と思へたのうなむの日す形りぢ
さくえりく神よくめぐれふをそへりやましゆ
志くめう令とまくわすはまくにつけとをきうは
もすひう音そげとく下の一本とくろ中れ興と
くらうてど誰かうそじほしなくてがくふとくいよ
ほよまく志うなむをまくしむくらがく草しまく
からくといふのと原道がこそく吹風のとにまけや

思ひよすとひねふとまこと浪にうぶちますりきや
戀するみの舟橋かけたて人や豆さみ林とみく
にせじした・咲きてもけよにと思やじまくら・せ林

雜二十首 神波

春日山谷の藤浪すらかり花もさまにあづれ
むしの山海の下年へから松とから神の事

天教法師品

ましましてらしく水よもよこすまひくまじ林と
壽量品

うき世よはづく雲のあけり人のふ月をかくわ

神力波

さくらはづく佛の道とまつて今ハ此世よまくはす

羊王波

さくらはづくのアレをまの上をあそび、まきる

無常

なまうとときだき世のよめがましよありばあ室
水の上に思ひす

別

えれてとふ禽らが様衣とつまむる山河をも

猿

れくく林とそきけ復枕まくとやよしにれのと
ゆきくろ鳥うちとたのじよひよやまとみる都のりと
そひよひよやまとやまとやまとやまとやまと見れ
にきかゆりたひの室と林と蕨く雲井の鷹とと見れ
様のえふとて山の月をよすとてなまくともやは

祝

志代峯より朝日をすす光り翠とがく上
り、志乃山代とえくも世中よせやまとくま

物名さへく日け

神山よく代へなんさう木葉の有無くそりとゆひけそま
もしひ またま

すまう思ひんひかくもあへたまねや春うれりしん

半臂字不可先初學已被教報不可直後
字可存トコトハニトスムトコハ如此可詠

述懷

又、山、いふたむれん白雲れよりしめ、たゞそふう

二見浦百首

文治元年四月上人勸進之

詠百首和哥

春二十首

侍従

よ、の、す、室、今朝、い、年、ハ、東、の、せ、形、き、
道、た、ゆ、山、の、ま、く、雪、ま、そ、春、の、く、に、と、あ、く、分、しけ、
不、ま、れ、く、ふ、と、ま、る、山、の、端、と、そ、じ、三、月、の、氣、
春、ま、く、と、し、や、れ、と、ま、つ、て、木、ま、ま、く、は、
雪、ま、く、て、若、菜、け、ひ、野、と、ま、つ、て、木、霞、ま、く、も、く、
れ、れ、れ、草、の、ま、く、の、も、く、霞、ま、く、も、く、れ、山、
風、む、く、も、く、山、の、梅、花、え、く、又、も、く、八、谷、の、く、も、
あ、き、そ、す、り、く、自、ク、く、望、て、春、と、く、つ、浪、く、く、
も、く、う、四、方、の、稍、く、く、て、春、風、り、く、く、の、ま、
青、柳、の、く、く、山、の、花、さ、く、雲、と、錦、と、だ、ち、を、か、ね、る、
わ、や、ま、く、う、り、う、す、さ、く、見、す、く、ち、け、く、日、数、う、う、
わ、き、よ、福、く、う、れ、れ、た、も、く、う、へ、き、た、ら、の、ま、よ、を、あ、う、え、

石をすく風をきよとしもむらしうてとさり花見すと
はなじて風とせようるる吉野の木も秋へち形
まなきとり花伏見とく行ひやかへて春のまなとお
花のちりゆくとなとへそげ霞の外よする春、小
當の水のあいとあいとせんそを下よ鳴うるが
それわあいと春へたのまよなばのうけ鳥のよ

五十首

ちり林のあすれやさくの春とへぐらひひよち
ふへてせよまとどえや時鳥さくはげまにしやうと
あや草引り軒端のシセヨモクうす郭公す
うめしやまくとて事ふれあみしぬのをだ
五月雨の雲のあたとゆく月のあれのせとがた荒
えよく山井水せんとんれがく代れよくわ
ダ井川の精わとまうりくと見ゆ、秋の少
けよだりせみりよとそりほ精をくめうけ下け
えよく山井水せんとんれがく代れよくわ

秋二十首

ゆよくれ秋のきよたよするまに袖とり病ひ見る
ゆきしげ昔とえほり鳥とえよびわくらひ萩の里
これとよしむせのえとあはなく秋の原の萩の里
秋のよし風のよだり空とよよ人をうしやよの少
児よせかと紅葉しれりう浦のよやれ秋の里
ひはりして月夜のまよく室とくりほのよか
さうりよ月のたまひくと雪と秋のうれい空よか
さうりよ月のよよくとあさりす月つをとれれの秋の里
秋のよよく月のよよくとあよせは思事

有明乃先のまゝ秋乃未月があつて秋のうち
してゆくと見ゆる月よりかは先とすすめ
せやまことに思へ、長月の月まつまに秋を繁
大方のねがうなづかれてすくすくの端に在ぬの度
そむきに雲斗のよもじらうとあけくらむ天川ぢり
山川の流れながら夜ゆれりあわいとてよすくしん
えこえと心よきの下草をかづしよりと
のりひとしましたの菊はまきをもさうあま葉
ゆきのもしろいとくいきしよくれりゆくれのくわ
すく今に野原とのやまとふくをかぎれ

卷十

神音自方ともくらむる筆葉を
冬きもへりはあしたてとまの霜とくわづけ衣
着にゆきりにの原つみしよひとすとけやまとかたへ
とまの軒端のれきよやうそくの身の新
とくりねとくられたのまた小時ぬよだゆふとくに黒人
物とくわいのとくみふる木けの木をかづ草を
朝ゆかとくはせぬのとくとく葉よつづりうらめしすらうと
さりつけのよれよれ松原や峯にと尾よと雪が吹きりそ
あたて雪をいくべつうらん木のえくらー岩れき道
おとづれくとくすら年とかひてとりまいくたいとおせらせ

卷之十

世中よだれいたひやれまくへれくすとありそく。四ようとを
わざと分わゆるむ地ぢとをめほし。そよとよの年とはりた
こ乃のせとりこう立たつよがはれとてなはとましのふきうち
ゑゑて。且よすりぬえそもんしひそく。のまはすがりと
天原あまはらの月つきのえ、いてよどかふ雲くもとよなふ
まか、風かぜはれはれはくとくして。そくとく方ほうは

志下人死ふをなげくさり六誰うへ一面えもまえ
あらきれつまゐれとしをシ言。待すひし
そはり裏へ中とかくしけはせよんとたのこちりす。
ひそりむじのまともいゆれてゑとも人のそむ

雜三十首

述懷五首

足ト、前首とかもう長めのうちにわざわしながい
がくわにあはれある世小みつてわびしとへ見えぬ(き)見
るを、是とくに翠(すい)をもとに行(ゆ)き思ひえ
りその命とさうありればえんくと世をめ言ます
月入秋のときと行(ゆ)そ西よハまびてすよんせ

無常

まわらへよ身をひりせ申(まこと)すてらるえもまえ
なは身を申(まこと)すてらるえもまえ草先(くさのせん)見(み)あらもんの(の)まき
あすともしまく小道(こみち)をひよせれよに別(べつ)うみゆかば
入れぬ人の心(こころ)がましハうらころ世(よの)うち

神祇五首

まやまほ月日(つきひ)の教(おきて)て天(あめ)の神(かみ)とたのしむるう
中(なか)へりてといひ三笠(みかさ)山(さん)思(おも)ひやめをもらう舞(まい)
きくよまなみじんをすこまほりかこりやーくまきーは
うれどもなまもし道(みち)へやせと告(おぼこ)りま
まうじ三輪(みわ)の山(さん)と年(とし)とすまゆくねりくらの空(うつ)

曉

あらきよ西方(さいがた)草(くさ)をもるそいと契(けい)て爲(ため)とくと
うこもとくへとくられタラすだまも人のすがま。

夕

あらきよ西方(さいがた)草(くさ)をもるそいと契(けい)て爲(ため)とくと
うこもとくへとくられタラすだまも人のすがま。

夜

しのむ林さへ空すけえりとしの月は光の

山家

山つき竹のあい戸よ風もそく東たかちう形えん

田家

鳴らら秋の山川かられだすとことく鶴なとて東

山

あけのきとなば面東よたけく山立つるへまよれ雲が

河

よそそとも袖のうしもひねくすくすの月長

別

すすみよやうだくがくろとがくえよすりやの月長

様

月すすり浦人の浪とすとほすまの袖ゆす峯れす風

楊貴妃

えふとくまろすまを袖つてあきき行のへを

李夫人

うづうづうづうづうづうづうづうづうづうづうづうづ

王昭君

うづうづうづうづうづうづうづうづうづうづうづうづ

上陽人

うづうづうづうづうづうづうづうづうづうづうづうづ

詠百首和歌

春十五首

侍従

うづうづうづうづうづうづうづうづうづうづうづうづ

皇居宮人詠一百首 文治三年春詠送之

春まゐる霞は又よ見えずれとぞもひく梅れちつ花
峯の松谷あつては雪きて朝日とすふ、けづくひす
梅花にかひのえふをすれどもひくとぞろ
あらまゆるねづもりれ一ト不す春のりひくよくまとくふ
あさゑとうる病ぬきゑてら春雨と玉たゞひづ玉やうじる
秋聲とつまきとづかだらへり霞よまゆるもれあけひ
あらかじもしれうされへとすと花の都の春のうぢ
白雲と風とまくにまくしてふせつゝれもとく
霞と花とをわびすすやうみの里の春のあけひの
雪とちひくれたとの梅花うづよきくせ志聖の浦
いたしてまほんなくちくすれのとき春れいわくあん
九重の雲のうへハ梅花ちりくまの名すりやうけ
すりにひちをりけりに春くれていくとすら花のうを
うらが野の花、そへきとしもして春ひづるを

夏十首

ハジくとくわく袖はなめぢつれがく、ふをりきり
きよきよきよ、がきのとおりうらに、ふくめうれ、童のわが
空をもくるてとやすゆよくとこまひます郭公の
なりなまりをあけそ時鳥みきげんとまれ、空のよき雲
育のとよまのとよせり、やく浦のうづれとまきは
庄からまきをとくとくとくとくとくとくとくとくとく
あらまくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
紅葉病よあさひとづかとやうりとててうとててこのを
浪風のとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよ
夕風と川とよわざらとよとよとよとよとよとよとよ

秋十五首

秋ひえとよせをじや三月のえとえく森の下ゑ
すしめだまくれれれれれれれれれれれれれれれれ

ゆすすれ秋あらそりよ夕にしも秋の上
神はれ秋ふるを風よけとまくくさん
そほれ花の落のよけに野風よたよ松葉
さく浪や志喜乃浦の朝霧よまよとくわくのゑ
わのよとくにと鹿乃たけの月光よせねれば
わむれじひまきかく秋の雲よほよとくの月光
よせもまくせせがくまいたの月を波打ち
まを川玉うらせれ月とてふれよしりかわ
山の端よからくみえりと人なめたり在めの川き
林にきて白菊ぬかけにかひふくれ物と有り
まひよもとれてうれ秋乃れ秋のすばよまつ初露
えく紅葉とどり衣半と秋のうしゆくはとくや
れてゆれれもとうちれくわまとうひく小峯れ紅葉

冬キセハ翠のかり称乃草れくれ霜やましよとす
だい紅葉うきうけたをすまれ原かくよもれ曉の
うき本の葉をといはれてわれまくとくとくとく
日け草くりうけのたゞりやとよのあらにまくとくとく
神キヤ霜とくまにうりまく月れやく山あいのうと
うれ雪よととこくわくめりがりがる衣れまくとくとく
背りりけ雪よととこくわくめりがりがる衣れまくとくとく
そちるあくろけと道とおれりつ楓のあくろあけの空
年之内よとくがくと車とすくわくねくまくわくとくとく

恋意

我立よ木よとととととととととととととと
みとくくとくよほのうよりよせとくとくとくとくとくとく
いきじつよとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とせしもの人のふともやうによみたるとかわあもむけの稿
袖の上まとせたへにほきの名とくまーそ
わらだらてえとえりややう川本しきこれむかへよま
わらんうれ錦本をもあれ未だめと名をだす
がれりん人ゆいまうにまちうまとわりそほすまわりゆる
えくわらかくてたぬく王のとよさに恨ひいはつきもくま
寝ましのふのわくせすふ病と時もよろすくせす

逢不遇立

あきももよりくえよまゆりうけたくとよがりま
年月もあきくはくはりとよすりへくちぢりやせし
なぐくとひすきりげぢぢりゆくわけまどのももむ
がきるひそくあそくわくらうらうわれ程えくら
よくりふ三のひきけきのなくまくすくまくわく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
様乃空きゆうりゆく立とわいたの雲れく見えなき
寄名取立十首

霞く吉野の山の林花あみんばかりうみすくせ
いじそのみよづゑとす川やすせり霞を袖よそをまく
ほこに月日とすくとすくとすくとすくとすくとすく
清見く用すり霞くとくもしよしよしよしよしよし
霞こもし袖よそを思すすみよしよしよしよしよし
素不まれくえよかれてらすくかき思ひよしよしの見
だすひとよくまきの月きがくとくあくふくとくあ
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
海やすくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ぬのひきの窓より不ふなまうすまうとこの上る

雜言十首

かくさむにむかへ命はすもそく志よがけり我すも
かくは身をいたへてあへてうちうらうへのまほ思は
さとくとふとばうてのくすり志よんむすまくらす
志とのくすりと今片づすかの思せどもくじれ
財のまほ神の中よとまちやとかよんよとたぐはや
うしきへときたなとてしもくすだわけまれ命は
玉一とのまほりすきいとくとてをとたうみやえのうよ
すまたまほ袖よまこくわくのきくがまれてはなす
見て見よきあくわくのあらまかとくもあわを
あひもとなとゆくゑのれを命や玉のゆきめくし

猿戀九首

草れぢ紅葉がひまつむなれとおとよにたよさん
かりよしにれと雪とほりてたら称えますすれきれ
やましやねをもじき浪の上よすのととちまくわを

寄法文立立首

人天交持^西故博相見

人の世は空とあひもし時よもや志の人がいへら金と

我不安身命

わきかやかうじた道を行ひ今とすむじのふきよ

又如淨明鏡

法よすじんよしとすもやまととてを立てぬわや

如渡得船

まとまともとひしたやく舟のゆり人の與あひわ

又如眼之龜值浮木

たま波浪うかがひ乃は木りあそびくせ——お仕事ねえ

閑居百首
文治三年冬与越中侍從詠之

詠白首和哥

卷之三

侍從

文あましや　わ坂木葉を春の日暮とすや
今よりれきむるよ春はこそうち霞をそなへてのり空
鳴くうたひすらうや春きみうも若菜と人よすすす
うけりうそりかはひて雪とハ梅乃もむじくすすす
えふも春はうすにれやえはあやさしもよれよわひり
雪きゆかく山うけのむとんとう岩巖のこけと春はをせう
らまひそけ玉まくくすすぬほよくうえとそしがらがむ
春雨よ木のまくくしりてあめうしはまきく方ハありうる
山里うまむの春れむなむよりひそらやわらはすく春
月夜のあれとくくす春の夜のうねくとく霞も室を
面白く保たるは世有まとく月の室にすむしと
さくとくえー花の梢があつて霞をきりとす言はうえ
雲のうね霞よこじまくと花又だらうよろとくんれ
た花称や五のよれの花風よきれなみやのうや
う花と三世の佛といひてとかまうりひのとまくまくへ
花きわよみふ本のけいといくとせずたれんよの春风
物とよふえへうそておまき春はんのましをまち
えりとてよやきのうがくまきま春れでくよし世や

さにとくすたみ春もまくらく藤原一ふ山の道
せんひのくま川の水ますそーとのれとまくす
たちもよしときすりうとすまにゆの郭とす
ちゆく、急とまんとけじて花たちもれ花えりげ
五月やんもやわむり年とて杆のあやれ風のまぢ
山里の軒端の木と雲うそあまうともえ背山室
らと称すくわいはいきかく身とあせりやくさがく
いきし志をミタニトモトモアキテ底まつよりのひ
り玉の又がりれく、あぬよりちといりえく
重むくとくまの生たぬよとくとてぬまくらる
がけきした池の達と風とてあいすすすれゆまくらる
背山のきとまひよてえらよつたよ川のあ
まよし野とまによこをがてまりまはねとまよ
草の原とまよととあよ。あくまゆく秋すもうみと
じして称するまきあらじすれしとくもくの秋の夕
天とまよおとまよ、風とねの梢と林やすくらん
秋よれ木のあよとやくとて都とがよ山下風を
がくとく我とし方へ霧ニシテ都とがよ山下風を
秋きのとてきくらべ著鷹をすのとくれとくす也
けだくりとて空とるからて野とならう深草里
とくよとく思とそての鳥のめぐらしく
久方の雲と本枝とすする東と
ゆくすれ空よんのかよる月もしれ乃雲れけり
まようわくらす主の白鳥より伏れやす在ゆの月

我れよ人すじやめのす紅葉廢れたまにえとやす南
風うひぬふり葉白菊れ霜とくえとかれくえで
龍田山紅葉とけだるれいゆよけくれの號
告野を見えし春の紅葉は生くとく空ノ原とれ室
あらきやくふね秋ハヨリ井てきしのれ霜れぬえん
行秋乃えれとそてねやましをゆくまがく

冬十五首

かくのくにうしれねと早うまつをと冬き今
今よりは、遠き里やとが木の葉とれの山の木を
風とやそ情のくは雲の又いはくようりとくえん
宣へりけり袖の色とよなひをかくもちあが
小野山ややすとさかまくらうに冬たらわと空よえしる
あらすち五はくをとよまくに一重うれ景をやひる

霜もすす音もへがれ、秋の月日
うやまく時とよすり初雪よよまうとく月日
いふせん雪と今朝下すようまくわきのの秋の遍
山上に楓もとく雪とそえりすむじくすと
浦風やとくは浪とく濱ねり柳あらはてなくふもと
すり袖のあひれえを年既そすしむれどくらもと
うよげり辛と、雪のえよえそがよくすれ物もとれ
春秋のあみきりとぞううてされうがき年既し
うくじれんをすとくうとくそく時とまゆくもと

戀十首

わきやしきき室とゆまづかひてといへ人ふうえん
たとえましわれや、ぬとそれたまをせぬ室の八重震
さえりにふりとくせとううだりとほきをまたま
見すれわくといはことたびてとすれがとめさせうせ
うくじれんをすとくうとくそく時とまゆくもと

いにせしりよとまゆきをもれどりまつらぬは
今えりあわ別ひ海川シとみけりうゑひちも
えまたへれれみうとみの上トせきこみくくへ立地
菊あらこれ物や人のきしきも長ひるすらむちの月
ちまくすよんすれ、高田川より紅葉カサグサの中だんへ

述懷五首

ひしてせしわがうにみよけりよ我うひうせとせ
こす浪ののうそひすまじ石のミキそのうち見えとせば
すそてなよる枝の花うふよくに見えされどもうか
れきした雲井の月とうづけまもとへか色よはせえと
れし又不一たゞ人をすてせはうとなきくへき

雜十力首

すのじる春日の山の峯ヒマツにかけとのとげまねの峰
花の春紅葉カミナリバナのれとあひぞれてひりもとやせよとまう
草ハサウエと思のまえの忍草いくせのやうめしもと見
さきの井の池のそきりねうつて都のうへくらもと見
ゆきがくら時ハタチにほきていもあはうあれとくもと山のほる
籠スカベのと嶺のあくとひよとくらやがる宋れまく
ゆくひだら大りしとくもきくわ竹カクりだくれの家井
菊キクれてもひよてのくわくまくわくらや今カクくも
さのうり浪のいくへとおれん天川原のれ乃もん哉
草枯ハリの野原のこゆとくうれてまくわくひの長月の室
にてよまく奥カミをくわいわくわく梢シヤウをくわくろし
いぶりよとんれうこくを生田の川カワとれ志茂もく

奉和無動寺法下早寧露膳百首文治二年春

詠百首和哥

侍従

春 此是同堀川院百首今略不書之

年少のわんと春の夕月、いふなんとも春のあもあ
をまゆる初子のよの小松原春のまと升と契ひみそ
だらうくはてうち春の霞と雪とさむかわくれ山にせ
鳶の巣とまうしろくにけよまくうかの若音なぐせ
いまとあまの春のまんを野たもの若菜うてしかくし
よまくねがくわきくまもとそりしうはなから春の霞
こうそれ春のよひよだりにうり梅と巣とめくらの空
とくよきえどりれいよひうらむかひ春くら方せ峯のあやま
碧くよきえと春のよひうらうらやうそほり合はまひ
いせん雲峰の桜みれくわくすとよくと風ちくと
春の花と桜の花と春の花と桜の花と春の花と桜の花
春の花と桜の花と春の花と桜の花と春の花と桜の花
思へ道のよへつよすよくよくよくよくよくよくよくよく
きなしほこまますをじきしろれ水よとくひまかべぢ
春の花と桜の花と春の花と桜の花と春の花と桜の花
用ひ道のよへつよすよくよくよくよくよくよくよくよく
おがくわくよくよくよくよくよくよくよくよくよくよく
おがくわくよくよくよくよくよくよくよくよくよくよく
春の花と桜の花と春の花と桜の花と春の花と桜の花
春の花と桜の花と春の花と桜の花と春の花と桜の花
春の花と桜の花と春の花と桜の花と春の花と桜の花

夏

いふせしひよかうりゆのよきみて行きをよの別と
秋冬のあらうすすみ花よ月よそにうり雪とそひとを
年と神と神と見えあれりあす草がくそじすと行ひ鳥
あはやれひよくよくよくよくよくよくよくよくよくよく

春なら一年と五月の事すまへ雲空よりやうて
もるなりともやく月日はすたうりそよび風ひともり
亥辰立田乃山よりまくさくとて衣もて袖々すえ
玉をう道ゆき人のことほてもだそれづく五月の空
すくのれたらむとあらうて見えぬゆきもとそへる
じうきいく川うひ柳吹せよまつゑうらんやちめうり
人をもひとへり三里かややかにがくとたのもとれ共に
はせよとみせのやとくわからくすれぬよやとう月かけ
ひじろふきせよまつゑうらんやちめうり有
山なり乃岩井根清水だらうしのぶのうりとくやくもしん
見えきて年とさうまとがくすれねむれ

少

もしお山より秋の音此へけしのあれ下葉をじ
女郎花さうひく行やれぬのよひておまむとえ
三のよすものすき、そりれぬゆうとおひまえん
そくわいはをひりやあくとれくへやうにあれそよ
藤くまも草木をきりまたア病たり野色れ秋せ
これゆゑ病と袖よやくとて萩のまびと秋申本
草むらのうだの原よ風ますそまゆく空よ初からなく
鹿乃林はげてちどりれあれそやめきだよしのやえ
鶴舞ふまへりだるのあうひてウケサガヘシハヤリ
秋よく廢立しうありうのへねよすたの空よたなれ
まし、まし、ましと思へ故ことさげわとか病もさす
なにかくまうてこまばたけもとひづれ用の岩が
秋えとれとくわくませてとくとく月の夜よ
そのよわいをされられれれれれれれれれれれれれ

うき玉ひよりくとひよりのま
又あへ花の面影よくらがりをれし菊
うもやふ端よりお玉れて四方れ木と六本うち也
うき財と世せだる一世界れとくわくよめうた

冬

まくらの木の葉は道もまたゆどいふとて、冬にまほん
月はまくら木の葉はくせて玉のひすく村はゐし
葉かゑせな竹まくえの見くわせやとくあさきやすし
うき玉空ハ雪氣よだりそねんとまく一冬にま
あしりの背もあしゆく楓の匂れんとくわふきとも
こりはのあひのまたねづれに青きうちをわせあらゆ
あら鴻千鳥とやらじとくみよしくすくわくよだれ
さりぬよがみてこりる谷水よゆりよろれすくわく
いがくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
立きり山あひの袖す箱みて曉上したあまくわく
かり衣もよだとのすりみてひす原よ雪ハナリけ
すミヨクわくとわく立のり立すらや春よすもし
の方へとひのトだよううてみかのれくすくわく
さくわくわくのまの空くふとをきわくらのむと
癒

れを又與なましこそりよ思ううけよとれひ
思体乃身をよくされぬへ三のいもへを物をかるよ
名アリ川、よもひととまくまくすなりハくくえくが
あひえうとんがくに與が現し乍り春の半ばゆ
別けうりをなくまことしてたのむれとれ、くくれ
ほくれよふよとくはよみれてをなしおきをせんと
だれよおまか様称乃ちた。都の方はすく物は

さきたさん人をあれどかりてア、更よきわ室れば雲
うりゆふあれよけとひのひよひすとすそめ宿名
タゞれふうえと里せすとありつまはるよへとよ

雜

うわうり物持ようれ腕ハ久とどもみせうて
松風の梢のえはげりとてだすむらくは波なりう
くれ竹のよろととハスるなぐもひくうよなぐものや
なく山乃岩林乃こけのやくすがくわきと見る
そくらゆのひよしれ和す浦やよしにむれと見る
またまみ山のあみたよやととくとくませへとう雲が見え
もやせ川うよまかのまくらがくらとく見せとねみければ
うれととせむりとくとくてたよるかきの煙と
うくやきよみの用よより浪と物思うてよだちやから
都とえ玉りの袖ようみととよとだひ静の處と見る
うるきと契るよしとむじよとけ牛のわん、えりなみ
山家と今、かくつとたづくよひ方すみ道やまとん
いせんむくてのす、ひきがへときばわらぬがりまわせと
面えととくとくとくとくとくとくとくとくとく
ね、玉乃馬、ばく、よまく、うはせ、ましれ、つもく
かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
有ととがくとせとくとせんふのくとくとくとく
思やるふべきととくとくとくとくとくとくとく

重奉和早率百首文治五年三月

百首和す同題

春

吉野山すまゐ方れたよあさうり、ほり良の春のじせ
子日すらのへべねのひきくよ浦山志くとまよあすれ
春やといに谷の鳴らすきを白雪れすいれ也
りつとよそしのがくみがえをかくわのの春
心もあふりしれきうりはキしてお打き春の雪
春の正月のかげもあせん先よ梅乃以ひまつむ
う色とく昔とよくせふるもくらひ青柳の糸
もしおむすりてゆきすり春のこすもしめど
よさんをよまのたうすく梢くひくすむとく風
春とまきかりくめよまつとひな草葉ホシキきくあはまく
ひきくへばわのまきじまにえくくのむとこまくね
てねくられれれい前ひくの春とぬからむ
くす正月のけいもあひそゆくくまみよこく
すくにうりたれみぢりがまほとされのこ春はまよ
ゆく春とくもむくわづ花が舞うだらにそあすえ
もくでゆくまとよほり山吹よとまくもまくすく
春乃よよたゆくよおひしてくはづれくえとえ

夏

ぬきひよせみれ衣袖われて春のまうと三の林それく
いたりひくまうど里と浪石よえゆりや花のあ
天川なまきぬ物のく年くあてのとくとちうえ
郊云せよなむ物とねとくやせきく交はせれ
風かけ年うれ花よあすめりとくあやうれ行の匂と
たねまくひよれ花よせひよりだりうたれ年もまよ
うりよう三のよううすすり衣袖わたりともぬやくえ
とそうとまくのひくまじ空よくすく五月の

終來花板と吹風のヨリかどりあら月ひうて
立出乃いりそよぐなふくありをすけする浦
勢やアタマナのあや草枕だらけんのとみうちへ
あきゆよよこね上方れうせよくましもよ蓮葉の房
よしひまと人みのちたまひじゆ山ゆのむら半の風
えうだすと玉リ人立すあされをとどくハ移すがりをの
秋

きよとい魚、稍よ秋乃風だそをくねをめえりうり
秋セや、ふすけし天川未まつまひのとく林のと
ういちり猿とけぬむし森原やわづての後れ猿あく方ふ
三のめよよく袖乃處のえととうちくまち節巣
人をえあれりし後れしの林もくとく薄秋のじゆすが
木きころまよよきたり風のとくにまうよ林をか思は
きよよれとやまれ峯とくとそともりひとむ初鷹の上
終來山の春はくよ立かれて花のうへ紀ハ鷹ヒトカサ
せたしぜよ字の川浪聲、そそそち方のようよえ
あまがくふたふりとくはるびしのふれ花をかくら
かくく、秋乃るよとこよひとよやにてすすむち月の弱
月きよよ四方の大空雲まも千里の秋とれじ白雪
見見て林の伏見の里の名のうてたりよたぬよ衣れん
ね玉乃くとたよれとれしよれとこそと稍よ風よもよ
立田山やまのがひらぞよて紅葉とよも秋乃れを
とすと契われの別れくとそりなくと寄り袖か

冬

秋の風と人もさよへぬる霜れり冬れ山ゆや
かへり又や梢す雲乃からふそけり黒や今志もえ
とぞうそぞうう菊の冬とえがくすとけり冬れ声す
われすゑ笑ひ山ゆふ風とて嶺よすきく浦のまほ
秋さうさうばなみゆくをう西の枯葉すゑすす雪家
えへせと浪うめりととがたかすひのとく風やよくえ
長月と思あすの浦風よなく称とすす友千鳥む
大斗川浪とせきゆ吹とて冰ハ風のしとすりう
よとててもとせとやくがとくとく入はれとみ風と
波と雪と、まきのとよと手とてシナヒシシナあすの
こまちなよがりとれとめすり天雪まし。雲ハ半らと
うつ令ハりれがととあますれりわう年れんむ
癒

難

うらや別のそりと契とをなしてあとく暁の空
草のふるよとへばまきもじふれしにねれりこそ
時むまうたの竹のえよと私のあられのよくさゆも
されうせりとすよ人ありこりよみりけと道たち也
木そよりわいをの西よきももひきうどと
いじせもそれもよませとどひせて吉野の山もすゑぞ飯
久ハ見しむりた物と立田川紅葉すくねも一とき
さまひき物あれしれ用をみてははとくわすま浦を
やどりそあまたれ廢れいよくたしくて命せたの長橋
ゆちえり日より道のたのほんとうに浪の入る
處だけきよやせ中山才くよますにてすくわやこ駆か
れてゆく春の霞となくこそへらぶきよたちややく
ふく一立一かすと志のよそとすくもむれまに多花
うたの称よ草のきじよとすくもむれまに多花
いばれしとそれすみひとすくもむれまに多花
行えりぬうそにたへすくもすくへあんれせたす昔と
天津空月日の朝も去れうそ千代ハ雲升て霞えかく
花月百首和歌 建久元年秋 大将家
詠百首和歌

花月百首和歌 建久元年秋在大將家

卷五十一

權少將

さうもさと小日より吉野山空をひくよがりち雲
あやびる山のそとふさく花の匂ひすも春のあけあ
花吹きよよまの春はく行き霞のたむ行き比か
霞うち峯はく朝だけ紅くらわまた川をす

ゆうたうの梢。風あれてての日がまう志望の山と
花の後八重立雲よそもそ春ようやう三吉殿に
さうあれ花うち不思ひみうは渡ふくらむ。春
わく。雪と月とのえとて梢よゆり春の山かけ
重野山霞すにえす谷風あらかく。うれえまうん
おきゆゑをよしくじもひうり花よけの山道
をなした日小あくよとゆ。青すそ空すと又やう花をうり
りしきや玉くを。桜花てす朝日と光をくらう
が。そくい春日のときき年代へき花のかな
たれりてもゆきよ人のききまつ花の句ハ都うりう
こにます。桜のひととしすくしまるてにり花をうか
雲の内雪の。一だり春のひとなしやあくともう
めかせす。いぢくえむすまくうらしまきしの春は堂
八重桜。もうけやあかくも。うけとみね花。みね
竹のきねの柱。こけしせと花の。え春をうひけふ
花の。うらうらうとだれ。岩りあれとくひけふ
枝えすねの。あく。梢と雲と浪と小たらはるわ
空八重をとく月の先にそ、けよれのありからゆ
花。香ハかりともとゆくを。風うけよゆく。春
思うゆくと花の。くとけよゆく。物と桜花が舞ふ。風もよ
ううよ。不れどもくまくろくはうくとじと春は堂
またれね花の。よひ林えてこだらゆ。春は堂
をぬだりだりに今度桜花又ハ新の春をうき

山桜、さむれの興とがすり人の里うらまん
えりとあしをそばへる白くまもと春どもけ
さうれたりやむ一枚、梢よのまんと
おほきんのえとだいもとくよの花のうにやまは
枝もく昔もけ、梅花うるよ空れ春のやまか卯
こよまどり、うづらたの面影、ありしゆれなた春
をよめく見えだらゆ、風がやまひ春れ花のう比
くれなとおちる峯れ春の空あはやとかじ一束ともりも
春風の浪、室よ成より花のえひの峯のえまね
山がれはのまへよられとやそりと、谷川のう
やすまつまとと、うづらぬと思ます、べき行ふされ
いじて風ろけととす、うじよひうづらぬとせ
さうれ花のわらじとすみかとくらその春の興す
うれをととととととととととととととととととと
あたゞ、さきは月を春くれてこけやたの下、うら
吹風をちむぢむぢむぢむぢむぢむぢむぢ
月五十首

秋きぬ宵ハ木はす、すりうそとて、アズレ
きのり月ひらにととひて、秋のよする星合のうえ
えをこらましれ、秋のよをじまく雲とて、いつ月け
うれ、秋も月とうけとて、光もうる夜の下、萬
利とて、月をとて、じすやとのま、一、有
ねり、とまふとくらし、草葉の夜の月を、わら
わらうし、山井のほの年よく、はくと月のれや
深まへ里のまへ、あれ、野となり、月をや

もじらやまわらねの風うて月とおとく室宿の橋
をまわくすまう秋のす、ふ後む月のあれをう
うなとおひいもよみはる月やすきれとうす
わはやまのあらはれぬと月、れとだれうす
まよまつて風うと月、れとだれうす
月をうすへ三秋、とこしはまのあま戸と我まじは
をう面ふく秋のをとれぬう月のあらはれ
うけうによまのをとれぬう月のあらはれ
用ひと鳥めく林すもれを有明の月すうばううけ
思や峯のえをのけひうたれ今來れ月とろん
すう林きてまう月とだれ今來れ月とろん
月と秋うれりたれ霜とぞとこよく又ゆう山うきえ
山よく岩まつとす谷川と走よせりれれれれ
まじれねり西よナリにうかけうるる方れれき
三のうち月とがくの別とくすれれなまきれ
月とよわうしげくす心をながへ本門のれ
あきえ秋乃よそとすれれり月のれまのま
いと里うれき野へよやうし光よより月とほ
秋のれに有明の月の月とばせりてもう代やまも
ぐわとよもよ神代もたゞよ見も月のれ
もうくの先よ月のしすくすもやそまゆくれのれ
月とよみ羽うりがくと風うとあれも秋風のう
あくをそり山う端とく見えくとくたれ月とねむも
袖のうれのたやうすとくとくをみれれのれのれ
ましよ昔の月のひ、とくとくれれうだととくの

四方の空ひとえよ見えりてきし物見るれのやせ
夜うらのきよ月ノ礼にて道ゆき人のそとをきくす
れそそてすすらん山人ノ月や秋とすれらん
あくまくふきふをなむゆど山のそらに月のかげれ
見れよ月とわんむねひそよ我方のはれゆまの秋
志うそ月乃ふもまくすすがハシムれの称まろと
峯め浦の浪風雪みてる白妙新のよ月
月きよせざれな草そりて月、雲の景すそらを
今うちれ梢のれよくと月、峰、峯、かせひまうりけり
夷時ぬ下葉のくわすれ月、月とててりまうりけり
山の端れむる事、月、月、月、月、月、月、月、月
わきくわくの袖、月、月、月、月、月、月、月、月、月
長月の月の有の月の時、月、月、月、月、月、月、月

十題一百首 選文二年

権少将

詠百首和歌

天部十首

四方は雲斗立ちふけほ月のキ、起とまじ春、生きふり
ごれり空といふよげくておおよわす月れけれ
すすきのあま林され代と空よそ星たやくれ乳よこれ
天川とくよりれ林ひてもやふけりぬえれよばやみ
そりとだらけとけりそよほのえよもじくく称ひ
見すまくれがく風のそにまく昔のゆくとぞと
生すたぬあすまよもぬよもむとくのうほととろ
う日うらまくは風よ雲うそてうれしきやうすれ
かきくへ軒ぐれ空。ひすゑとすうらむわくはくはく

地部十

あをきしうけむる谷れわくの道、く代へぬし。告かし山
川らによせてかくもまき浪うらわもとそよまきを見
り浪うまなく叶をき玉、へたまくつへあみをもる
見えましとせり浪、秋もて紅葉、川がわすはの罠
川井もれね柏まし雪水冬も池の川もりきし
春菜ほしもとのさくらわさくら霞のうれ春のえれ
秋井入はまくわゆ、月も空はまの、月の
月のまさせきをのかけのれきよ一葉あきのすまは薄月の
ちへみにとだれ楓、ゆきまよひ又今更のやや思え
がりともがりんやあそじゑやきの野籠のまくら

居處十首

りじれやありすむのの方よまく霜くまきがるのとす
くまとだれくられたく火のれりて月よしはり秋のえ
村落へくろとよりより雲井とうまくすが
見えれわよよみをいとよしんがくわよく立別と
たひれ、くすひ手のうちのし思ひわいれしまやくと
まとの戸よ今ハかぢりとよすととぬけりす山の陰
霜のわその山田り称て神りよろいあもしり
ソクソく道のま原をううしてたれまじんよく晴
わくようう行の下をまとしげと昔とすのまくら

草十

年之内ハ今日の三時よりひ草がんみあれとかくてもも
神代り與りてよあやしすり衣のふとたまし
やうすむ雲井とがひ日氣草ミよめうりれえまとも
そうちをよきよまくしらうひき／＼りせめれれよく
霜じよとおもひよの思えまくしりんねやまよじへよ
わくようう行の下をまとしげと昔とすのまくら

我に在り浦乃もまゆいくへハがまのととかぬのを
さうあざれの下處たのこどもそらのよみの神
そらもやうめかすのよみのうてんとまくわく
きれてとわせよより若せりれ林よりれども陰

木十

草モ本モひしよ木門霜ノ内葉がねねのそ
シのこゝれ神社よりわきとさきハカキモルカキモリ
まきも地檜原の主をミカシモリヒ昔れ所とたてみてる
主は弓矢を小なりよりくと、乃はきと松
様まくし下毛とねりが主袖も引ひいと里霜
月毛と楨の葉上にとのけぬをばつ青色毛と
鏡山をきうだら玉椿かけくの春れうれし
ゆすれ風すすむ相の葉そよ今更の秋が秋

鳥十

三の山こまうれ奥よがよれま羽もりや人主を
わせとすとの原野よりきよとてこつへたと主をす
風たりそとくよかひそやされやくも私のきはるが
かひ、野やくすは下よだはきよとせりや思や犯まぢと
タ冬の雪まほ日就情うそとふくらとやうまゐ
す草れ里ゆ風かよきとふくらとやうまゐの村す
まわだよ霜れれう草れ葉とまくらとくをだま
人と冬れとらうまいよかき林うふよとお半を
はくらわふよんげりだらうがくと樂へきひき

歎十

洋と春れれひきくと雲井戸をよけわと馬

霜上^{かみ}にむかひ別^べのふるまわや月^{つき}を牛^{うし}れども
わらはり木^きのまといとほりす木^きのがまわら
はゆそよんうにけのいふそりと月^{つき}のひれれをまわる
山里^{さんり}ハノのかよ^よあとすしてやとり大^{おほ}へとえりて
花^{はな}トドりしもとまよなくもれふすく春^{はる}の月^{つき}かけ
思^{おも}ふそく人物^{じゆぶつ}うつくしもと一^{ひと}山^{さん}の奇^きなりと
はよ覗^{くわ}きうねのむか^きうそじよとせんじよとせんじよ
ひともくまほ日^ひれいねとくのむのあまく、
た山^{さん}のよみくらはれたのむし道^{みち}とぞも見^みれ

卷十

なへるがだらだらのまゝすくかづれとえぢく
終りまゝ引られ先と別へ行きそのへんを度
今朝され野分れ後乃あられ玉うのひもかふる
草トに生じのやせやのがれにていよすとだざ
よそてせせつる金の軒よしむらはすくふねどよ
春ぬかづけ里とキモれれれれれれれ
ありまうとく文と月見へてあらぐれすかまち

神祇十

てし神ら山朝日ゑまく雪舟とのとつなは
りまのやひよもれそんがち君きみハ神のま
春思ふむ乃原吹舟乃雲舟よだに代乃
さくさんと、わの望のひくねがすうくせのまくは
かく山やいづれと、あくわく下北山、わくと
だのり山、月丸がまともじんえうのを
面氣よぢよもくうしゆ不く冬の雪舟よし山

雲の山をもれむけ、かなとみづれひりに長よれや
和琴のれ浪よふ、すとまく見とみや住吉乃神社
やくらえやふて、尽よだのし日月一丸身にや

又教十

歡喜地

川さ乃源、まことまく長じ世乃用といはと

無垢地

いまとくさんくふーとすが玉くよれさひとされ

明地

わきうけき朝日乃まよあた、山雪と水も消りくされ

福惠地

冬枯るそよろれ古枝、さくと吹く風よおもぢく

難勝地

現前地

すみよし地乃ふよりてこよれきに涙をよぶ

遠行地

さうり山くと見どもす橋されどやかくなくひ
たまえ

不動地

とのあまむすばうよひてうこう道のかくをなむ

善恵地

そりうれ花乃うらんうひき来てまさりがうれびを有

法雲地

有空の法乃雲ちよむじ月つかましもわえをる

詩合百首 建久年秋三年終今年雖將休別儀於後院

詠百首智哥

權少将

春くしは星乃位ト氣乃ト雲半乃トいはうなどやう

餘寒

霞あへもるばす雪・空とも春ゆよれども大のり

春水

冰カ一もれもく浪立鳥り春風トキ地乃不とか荒

若菜草

そそくとくとくのきぬくとく花のうつ葉のまは若草

賭射

りそやそいくをわぬう昔よかゆき春よあよ

野遊

ゑの春乃心のがひまくとよのうのうおひけん

鶴

すほすれなとく野原かすけことお道や春よ

雲雀

もよとよに若葉の音をうちまひき雲雀なる。春の聲

遊糸

うがゆ春の糸ゆびく代へておれよりれ室よあえん

春曙

霞、花鳥よそりして春よそぞれ全あわきがわ

遲日

なみのよひぬ光のとふすむじ日よ花きく山行を

志賀山越

初雪よふ風もいづて花よにやう志賀の山

三月一日

かく人へあてこぼすよさくの浪よまく今朝

社

木のよく日暮えりと白え葉のじみ春のつば

夏

新樹

葉すく水ゑくえくたる男の梢の新樹葉

交草

交山の草木乃だけんとしらす春乃く小松くへす

賀茂糸

雲乃上とけりつひのりくつて出とけくまとせ

鵠川

まうちにはくやくすくとく舟やと光のかく火の乳

交草

交のよばはうりく清火のほれひととくとくの跡

交衣

たよりとまじけりとからてさうかおきえゑれ

扇

風が上扇よ秋乃さゝれてきてあらゆるの月

シ顔

えうて草は重ひ月のまがひますすやる

晚立

月や車の下まう立つてにりの室

蝉

あゝ梢もる下まく蟬の秋とちと空よかな

秋

残暑

秋ももし里山のあれど鶴のあとす

乞巧貢

月ももし里山のあれど鶴のあとす

鶴

秋の葉よきうし秋の風よやそむのあく

野鳥

秋の葉よきうし秋の風よやそむのあく

秋ア

秋よたらぬすいしそをまへ里のいゆてと風り

秋ア

いせりやひよす白田のいゆてと風り

鷗

かえすものづれ様れ袖よりすのうらすれ

廣澤池肥日

すみきりわいえのそと月もすくねひまゆ

萬

めの至れはくを折りし野のそと月もすくねひまゆ

柞

時わらは浪さくよいれにそよぐ風さうし

九月九日

いとひとせば長月と寒もとほじ萬葉と白露

秋霜

えりそ林ぬきうちも霜よどすりれあきねがやめ

暮秋

有明乃名すり秋の月れよううそだちじれよ

冬

あまくちかくがくふ春風をもくとし

残菊

枯野

よしよとへりの千種の面乳ばかりのくすりほりや

野行草

かり衣をもろに通もだらうりもあゆみのをむ

寒朝

ころ山の峯れりましまく模のまほひよしあ

寒ね

わんて又冬より雪れらるを年下れねて冬あれ

椎柴

あめとふ冬も人をまわすよの雪太桔

衾

ひきうち袖をひそめのへとものきがうち鐘の
佛名

かくじのういくま風に辛うて三よれ佛の名をま

寝

初立

さひつをあまゆいがたすとすくすは空よりまとを

恩立

おとせんじやうめきだらひくせく袖の下を浪

用寝

あくせきすくむづきり名のまきてやい

見立

面立をとへるよまきたちをうへぬのねよづく

形立

年もへみのり契ハセ山なりが林の下をゆす

契立

わちき前大れどもるく令してたのうがれられとな

待立

風立をあれどもれに袖よアそすけよよよよ

逢立

方立をあすすりはくふらもなれて多くれ思ひ

別立

父立をよき道の野をまろ令じよわせり

顕立

うり今立の生立をよほまく名なむ

稀立

年うからうとれとがうと我しきに名う等うとす

絶立

今うえうへうううううううううううううううううう

惡立

わうし後のせうとうううううううううううううううう

舊立

うううううううううううううううううううううううう

曉立

西ううううううううううううううううううううううう

朝立

雲うううううううううううううううううううううう

晝立

うううううううううううううううううううううううう

平立

だのううとうううううううううううううううううう

老立

あうえうとうううううううううううううううううう

幼立

葉ふとうううううううううううううううううううう

遠立

ううううううううううううううううううううううう

迎立

ううううううううううううううううううううううう

様立

ううううううううううううううううううううううう

故立

ううううううううううううううううううううううう

亥月立

やまへひよそかまくらのまくら

宋雲志

寄垣文

さうりてあはれ風のひとにて手札しに私のこと

さくすこよひうきとだもく袖よ風の時りうき
空の煙立

寒煙立
てゆるもと

寒山子集

おまえの心はやがて身にあれば良

寄序

卷之三

人ヒトとタメのイ

「えりもくわいづかみの草」

字馬之

卷之二

之やまくすすめへやすらぎとおげくがう／此はひ
要と

寄生毛

よすりへ與うしりよまかひきぬねじりか

寄留立

立行ひテ一すと與そぞれ恨とのこそとや

寄琴立

昔まく君てもれめ、ともかく多きよして林すがほ

寄繪立

わやだれんせれすとく業とく業とく業とく業とく

寄衣立

寝とうう思ひ既まはえとし才小し春れ花の衣半

寄席立

半くすばり袖ゆきりと称ゆれどこの袖もい

寄遊女立

一束うすのつゝれ里乃年れむしとけり人おちゆと

寄海人立

袖う今をまれわまといりせんをよだく・思ふれ

寄樵丈立

山よしにきけきころとおとれぬくよくよれ道れ

寄高人立

すづれ市や日とすりしきほのうすあすきわがてあ

正治二年八月八日進給題日廿五日詠進之

秋日侍 太上皇仙洞同詠百首應製和哥

從四位上行左近東權少將兼女藝權外藤原朝寧室家

春二十首

春まゐる今朝ひ吉野乃あさひけびよがすし早れゆ

あ玉へよれあらどもりく、上段戸といひて罵
春れまとよいの野守たうわいとまめをす。春をきす。
わく今夜多衣がまくまの都もちる春きたりとえ
らやすらぎがくへんじく御にじゆふたののれ柳
梅花もいとうす御のくと軒り月ひかけもあ
花乃はりすり月もあくわてうそとくえふね
千鳥しや者のうれ、我身づゆ春の空
在あり日けの山の端とて、もくら震で
思ふら山のりくもすすむのうかくつかりも
いはやま雲よんりがくじう花乃くわくの室よろ
注とせねくよふうせとくくくへり春れ「か
白雲ノタモ^{タモ}、まよひてくとくとく奉とおもい
高砂れねとくやにとほてよわのへらまう今ゆく也
とめほくううとくとくの月ひりくわくわくめをだれ
ねきうてひくえとまく衣^衣とくも夜の面礼をすり
すれ初日礼もくとくすまにむすべりにまくま
や花のかきゆだまとくらぬらすとあ南玉わくま
わくらゆく草れゆりくわくとくわくまくま
わくとく車ひたらむ風すくすくとくに社る
郭ふ走りやまくす原や方へ里のしゆれうえ
りくますなよとすうてよくとくとくのうえ

文十又首

大袖と袴たらしく、ゆきりやへて、
玉はくわれよどて、かく袖とアラカマの
交差れあひけ衣引ともすすきり襟をすくうすく
といふ下りて、峯一よりすくわらすく、度の身も下りて、
萩乃葉もたのいふよしむらまことあひせみれえ衣
交う私^{ミツ}と玉岩^{タケイ}袖うちもくわらすく、たき川のあ
今^ハとくを少のれんの復のアキナすむ行水月の空

卷二十一

卷之十

久とあまつる神のゆうかびといせとゑすも
ねよとりの浪れ流ひあらへき彼のうゑ
あれど人ひのよしれのよしと海もかれ
きりよもりすとまととてくわくのくわく
よくとなりくわくのよいかくわくはく
暁はくと袖ともいり山たせもあらりたり
まくわくわくはりよねみれてふのまくわく月とし
うきはくわくはくくとくとくとくとくとく
たれゆく月をあわせしよのと鳥比翁とよ早村
見せやまつとせよめやとれれまきとくとく

卷之三

草代より
草代の事
草代の事

浪の色月と都の音と
さへせども浮舟人
よもよも山の山の名の月と
不思議
こよなくも岩本れやまとて人をあわせまにかく種
都の色月と都の音と
不思議

山家五首

處へとれどくれ山よい年もとて、神のまわ(きれ
秋の日よ都とづくあはのとがくらむる背りしれり
浪ひそよす海の里へうらまくや徒とよやん鳥の
見はたのめとあそり立りせよすれんれりにけりと
をの西ハ度のうそあれりせうようり行ありがき

鳥首

やまふなぐへとのも、
かくもうひきえの馬
とうしげよとのとだひじよだれ志代ともあもしと思

祝立首

万代と見るをはなむれそ、やれ山乃木山しきと
あまう空きひだりす。私の月はうなづき雲の上より
我ゑれえぞもし春のまてす。朝日は千代のゆゑと
れこと所くよねの枝しめ神とぞせといひもいと
秋津鳴弓民乃戸ねおりそく万代若えだん

千五百卷二合建仁元年七月造

夏日侍太上皇仙洞同詠百首應製和歌

正位下行左近櫛權少將無安藝櫛不長藤原朝室家

春霞の時と、もとより、車端のまゝとさへから、毛

春といふ花やひまわり吉野山もさうか零とまじめ
山乃端の霞くもりと、うけと春とへるの室とそろはれ
やま里ハ谷の鳴くらとまき雪しり、ほり、ものすこし
さくらくよ又やまとひしん若菜はし野とあ寄れ
谷風のよきあけとけ梅れ天津空だり雲やほくもし
里よりの月とくらまくさくくは四雪れよりむくと
春やあくの空ととがくにだらうつといたこどもすも勝
わせきをひやれり称のむや迷走くくびの春あくとま
もじやひかんぐの春霞花のよき山乃端比をえ
まくは花はまくやまく白雲れどもふむりととせのよ
雲の霞花のよきにまくは吉野の花あくとくらす
まくはくまく霞のたまうりあくあくむりにれ
わむらうりし霞の夜だりらを袖のなまくら花の花くけ
花の香を風にまくはまくはまくはまくはまくは
うの川たまく岩林とせきしやするやくまくや花の花くけ
きはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまくは

及十五首

あきれまつゝゆのむらり神よこすの春のひうれ
まつせし人のたゞくさみの神とけりえよそちくゑを
町の里へ玉川へはよそえのれ松とじむじまを
よい草がりゆのまへりまわらきけんたれとま
よだれとよなきれきれとまくとまくねの下け
ゆくかたまく林空たまくのがく風や一れえん
まくはく年にまかたるがくまく青ハリルニカホミ
をばくねくまくはく草ハリルもやまづら

天川やきせをすみすみのよ早とよき雪のいふれ
袖の香とたとうもがたわけはるゝ年月の月うれむ
久とれ十千里川のうひ舟、おちりてやまとまえ
え衣すく川原とそぞれ主のよすく浪引る
をうれ月またよひのまときわめゆや川へのきのき堂
山のきわめゆまよひくられ上なのまくゆゑ花
たがくにわくわくらゆよひえあらまくい鶴川風

秋サ首

今朝より風とたり生てし秋色に涼やかたても
みじくきのよれくすく吹くし衣キテすきれのうを
ゆくれどあまのりよりのれ秋まくらうだく也
ね乃まれはれとてみりけといだるゑとがく、やだ
秋みゆく神玉すくやあくやそおま月をやいかれ
ね玉乃とくとひゆくれの跡よあくの月の秋が
おひれぬ人のよゆくやすと秋、秋も月すむえ
高砂のなづ麻のとくれ月うかがる月れ秋
みのまくらすてもうつれ身うちよとく月の見れ
紅葉もく月れうくよれくえまきなまきし後
く秋と千、くすくけしてわく我お月くと月がて
いとくすく馬の尾のすくねの霜とくまよく衣れ
いとくすく本枯したすめおと長の
よろひ野中まくゆくれいじとくくはれの初
冬をすすり里の様れおまくやいりえれの白房

秋色も紅葉れどとがまとと衣へんきよ乃神れ
冬キアリ叶ぬるもとよもとけ自よもやひもあ
のうよあれいのゆき月井せまはばねのむす新
かねつ草はまたあらて岩りあとじもしもとく
えりやあれどみとく霜きは風づをゆき
花すよ草はだとももうそねだよ別一秋よも
時菊イチブ奉れねけほれなすしはうち池の通路
楓カエデ全ミツ叶ぬあい承れ浦シマじかのまよ
えやハ秋ハサフひくれ浦シマじかのまよ
え風よやくハタハタきよきよかなひく山の冬ヒマツ
なく千鳥チドリのまよとさひくりうす舟ボウとらねまよ
とせとととととととととととととととととととと
かくまわこうまわこうまわこうまわこうまわ
祝五首シクゴウ

わくらをかうらかくらとちひく神ミトツノムモ
ミル、これま、木よがき、
ヨ道とま、木とま、もしよ、ひゆれ佳ヨシくま
万代の春ハサカよ、あさもし花と月とのすゑひよ
四方シガラ海シマよ、きよま、
歌十五首カクジウ

わくらをかうらかくらとちひく神ミトツノムモ
た、又やなよよよよよよよよよよよよよよよよ
え、さくわきて、よよよよよよよよよよよよよよよ
か立カタタのあよみテ、よ玉タマひとだわくわくわくわく
きよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
事モノやのす原ハラりよよよよよよよよよよよよよよよ

だるみうけまふかむく海よ先をひのくれよふは
人ふくよだらぢだよトうえんをやうすれんを
西れきよかくめおもよのてあふんただらきくも
思ふよだらきよくれ暁もヨリモトキす月をつるもじ
ヨリレシよこくがきりせとひれんへてすの盡てじ
そと文あまへりめとやうにれれももじもくとえ
かれわらまもかだりとくもそとなくこまく霜の下を
まき風すり井の浦よあひてしただよりうすとがり
久く月をつるもじれりんふは山のとく

雜十首

大方八月しづる鐘のと小きばくうき有ゆの月主
まよひづ野山のまのまのまくねとこく、
じく代へぬかくおうしとくに大室アマミヤマれしれ重とくらむと
そよれねれれやうだくまのまがくくわくもほよむ
年少れ霜車れやうだくけと、清まそ神のまくは
じけあうすとせみきくまくとくとくとくとくとくとく
をうは浦よかくはりれがれつとくとくとくとくとくとく

内大作家百首 建保三年九月十三日
詠百首和亨

參議

春十五首

早春

鶯をまくとやわ春の雪こゝとじく山風よく

あひるの今とすと山をし生すや春とす

野鶯

春とれかすをよまくもむえをまへまわら鶯と

海霞

まくすて良りて山やさん霞よきとけすまく浦風

用霞

まくすて坂山のかい川霞す用下もと

朝羞菜

たたきとまく霜霜のひようと神すくとてまく尼

庵梅

神すくを金のかくと梅とようと神すくとてまく尼

東林

冬きく月かづくに梅花空ゆくけとまくまく

裁衣

ちとけらすよしほまくの梅花とくやまの不^レ幸

待花

霞と山のすすりとつとよくすりとおひくと

易花

鳥々と霞のとすとまへと西氣より春れやまよ子

観花

かくすり花のえ香とすりとまへとよあむ諸

惜花

きくすととあすはるや桜花とくや空とくとまく

残花

春とく霞とくぬる歸り腰ひ月いづらしひ

首文

あんそとあまくわづかの香ひもあふる三月

文草

さゆり草す。文草をうひてすへせむ。

初林ム

山のあきけに雲よ叶たはれ山のしれあると

嶺郭ム

どくよのこきくさやましりされたま山のまくらと

杜郭ム

がくます。あくまく衣半ヒトリ全けとばゆ

池早輔

さ月まか軒のあやられけえてまくじつとほゆ

山育ム

澤堂

せうれうさく力がまされすよもとだくうじ

樹陰納涼

えいせのやいはきうたながちて人よきのねりよ

秋十五首

初秋

あききりくさくあまくわづかもわがへりし秋能

行路萩

秋萩のゆくの錦ふれぬまうの手高き

山家虫

ね虫へとよもやさうだよ草のあらの山家

シ萩

人々ふきれ萩の葉のれのゆつれしきみえ

谷鹿

さと席のあさゆく谷に玉うす面えす妻やとも

原鹿

足のふくふの都の山をそ昔やとぞとよとよと

鳴月

秋のえかくの袖のあひはあひしきまほ月より

江月

あすかひ父の月のれどりてまほ月のむき

海月

冬の月の先と鳥よまほの浦のなれ松を

槁月

ちりうちり峯の木めぐらすまほの月とる

河月

さとれ紅葉のあすかひと月と病も財もせき分

遠村紅葉

うとううれむむ鐘れども紅葉とう峯れ等

古寺紅葉

あましくあすかうゆく萬の葉よとく霜れねんすれ

暮秋

冬十首

田家時雨

かりのい田面比雲ししくすけ角ももくえ、半下も

水都集序 野徑霜、たまむ花をうそまきまくさか人の地とよる
冬十月乃乃のうじあへうかがくも浪ひとよや、風ひよづれ

寒東千鳥

浦うちうりかとまくすすひてすくはく風れする人
洞水

鏡山平カド月シテシホルモトヨリヒツのうを
林雪

もしわりて秋乃なむけとトシテ紅葉とやまくめ白毫
。保更叢

あけひととまこをひの木枯よあれ東をうぐく林雪
宿(宿)

宿(宿)とれに津のえれすきくねとアハシ白毫

留雪

今朝又あとかき庵子んじのそれやこれ雪のゆふを
風雪

行年と今まとどうりしてよんきうとよいたがくらし

くと車、武士めだく火とくとえよしらへやゆる者無
佳告れぬとゆくやど良やどかたけくテとたまえ
ひ袖ある年をとく背とんれえともやほとされ
龍田山中西げりうれどもとて我行年とまれゆる
ウ袖よしよま浪けとれ與とくのとれうとれ
まくと霞の下ヨニレはれちよきかよとすと
あれをよりどすとよめやた。是と立とどはすれ
白玉はとだれ橋の石も門も立れぢや神の御座
今よりれゆきとよめゆきとよめゆきとよめゆ
玉とあくへい鳥とよめゆきとよめゆきとよめゆ
ありとれ袖の上ゆる若くう川今、我おとせくとす
思もろほのんよとすとすとすとすとすとすとす

いふすも浦川を下りて山をへるゝは後、事なき
あるとすむのをせの山へて、もとといひに命あり
まうねぬは單一にわれ山を一とすれどもさむ
黒の森をうち中れ葉ゆれ柳をもれ川をみ
やすひよそく方とすりんまえ山ねの林もみえ
うせよしもけはせにねの風ゆく浪れの箭
ひ見えりあられの林のあらうすよひもな
袖のさりやまく月光のあわてのはとねやなむ
見され思ひた林ともとえのれうゑてれ
令たわへあせとね浦川かくお岸もとよりもと
積の葉れふれとまの山よねうけは下まそねや
すくまほまほまほまほまほまほまほまほま

難廿九首

山うらやま雲れいけいの模様すりき月をゆく
草れいふくらむれこれ軒のそとれわら様にあじよ
えまごの衣半身ていくの草とえり中身の室
面あらわる昔をだらうれてれすくも夜、うれき

述懷五首

山川海里用

くとあくと旦一月もすたのよしうちさとだ年は多く
きせねあやかく代の日川からさくわを浪
うにやら浦へ舟れりけよううとすとゆくは浪
あらまやすとせは里ひそとよよきとよそきよよ
今、文用のうち川たまことくよしりつたと題

卷之三

卷之三

みよし山ねの木のまといけ日々くらせぬかわい

秋七月ノ下
ササギ
シマツノ行方代
ヤウタ

よりたらよせのすくわらえまへり星はれり
やまへりよしと美うだりえさせりたる白雲

神祇立首 伴妙石清水 賀茂春日 住吉

石清あ月よ今と契とうまひけく秋の夕ふと
神とえよがれ川をゆきくらはづ道よりぬくと
ゆきくらはづなまよ春日山すくいゆかめのりと
だくらはづましはづくしてまう道のたやまと佳吉の木
釋教立首 大日天迦阿弥陀薬師 弥勒

あまく空えとよどみ比ねよ東北草木もさすわふ
二月の空え北空とよほほ春に都とソノ一月け
九重の夜のとよとよハシナリ年をやまうきも

釋迦立首大日天迦阿彌陀藥師彌勒

内裏百首 名所 依末枝行中殿宴紀為審儀
初冬同詠百首和哥
參議藤原定家

初冬同詠百首和哥

卷一

さと川雪氣の痕し岩も用ひるゝは春半なり
玉鳥の

高砂

春日野

若菜はひよ子大の野守春日守より西行もり

三輪山

いさくぬよもとと、さき三輪の山、今すれやれすま

葛木山

青柳のかげき山の永日、空と見えりありて

キ向山

すくわ、これの神ト手向ひ花の錦ノよもぎたれ

伊勢海

さく海玉、うら浪よそく見風あり浦の春の多

志賀浦

さく浪や志賀浦のすじ日あわ匂ト浦風よ

三鴻江

さくぬはく浪よそくんだようれ春の衣れ、ひき左

ひれ山、ひりく、ひれ山、ひりく、ひれ山、ひりく、

華屋里

うれ山の我すし方、を構不力ふすしむかきに室

吹上賓

よそううかく、此處のくよ、とお風り、さきかけはま

湯寺三崎

花鳥乃、ひそひ、とおもあられゆくに、またの春音に

悲山

えほし、いもうち、悲山へんれぐのまとたすそ

水無瀬川

春ひえと、とく方代、川をせ川、すみれうの苔れどりよ

大淀浦

けいのね、よごく大木の宿入りよがく、うなぎ

田籠浦

大浦の浪といふよな夜雲をもゆく春ぬるもの

未ね山

あはきうすとのね山春をいすそし浪がすれ

冬十首

大井川

大井川かよせれあはく反きよりと衣ひすら

篠田杜

道の傍氣のほくなまにきすたのなり比下け

猪名野

えしやれ、みのさ原からさくわせはあややくと

拂裳瀧川

月やれりすり川の那

天香具山

五月雨がまればく山室とも雲をくら峰へまき

大江山

タモリ大江の山室うす林とけたり峰もこゑ

難波江

よどりやきふりにまく玉もれえはがりくらう

義宣侍牧

ヨリすちうかの神事やまのうもきタつての花

松浦山

蝉の羽の衣よ秋をまくひれれをすれ

秋二十首

白瀬山

もつせみすすゆへの山風しづかへたへぬのみと幸む

龍田山

心ありて乃思の立田山けり一ヒタナメトナリ一

源磨浦

猿衣まきひくすもシ勢よりよきやすま比浦

宮城野

秋あひておとすと下落といふも江の原

水茎四

又ほくじの岳乃まくすどあまたもし里へて鶯吹

小堀山

とくと秋のあんやのうきそくに妻つねまくす

宇治川

河浪をまくすとみんやそらの秋にまくす

常磐松

大室山

大室より雲もたつきの野毛よくぬれ草のるの房

伊豆山

こぬふあくと私のみよまきともうれのうちをみれ

畜池

時ぬくいと田の杜の木枯りのミムシタマフロ

活見用

きよとこしまゆくこましきすせきれ浪のれのゆす

武光野

た方よぢなまく鳴れ林より波うりじよれ原

伴吹山

秋やくえもくすもすきよすもすれなみす

佐良之奈里

そりの月の都、樂ありて私のもとすまゝの里

白川用

白川の用のせたり、ともとけゆく水のまへり

野嶋崎

西の日とやくらだらうしての、ぬよす、私の浦を

明石浦

火のあつれ沖の舟もゆく方たち私のもとへ

阿武隈川

立くはく白川の寮へ、私をやう用ひす

冬十首

清龍川

さしまし木たれ葉付と、まきかせ、しき清龍の

住吉浦

わくらえまじひの雪れ村町うらむる住吉の松

文野

かく人のかの、ミ宏らしきひよめうりあひやす

田農鴻

かくわす霜をかくら様衣たまひまくてもかひし

有乳山

あくら山奉れ木枯さくらく雪のゆて、おづきを

浮鴻原

なれ林よどぎの雪乃はくすとおし附もとに鴻原

安達原

まだり霞や、たゞくわくられまゆみ春ハ引りと

日惣山

せりかし秋乃田面よあをきへいとれ山のへを

鏡山

かくえん山うらわり浪力えすく空くあり有ぬの月

憲二十首

伏見里

よゑ竹のすゝみ里ハ君のすえづれのよ、袖とも立々

霞浦

春霞の浦。行舟のすまふをやくとくひ

石瀬杜

ゆきみのいとせりうのいとすとそれ下に風うき

筑波山

あや山やすすんばくは林のうらひよなまくとく風

袖浦

人ふいとよすたの池より一ノ火とく風

高師賓

やた浪ひだれまのりをれおうすげれ我と立あ

阿岐牛杜

かたよのあく比玉のとくうしきあそれ杜よ病きも休や

志賀須加波

秋風よなくねとだけちますれやうる浪よも袖あ

濱名橋

わ風まちやくまされよくゆく約とまきやうく風

磯間浦

あつさうくまれ浦よのあれ日かけかくあらま

守山

終身守まくんやうよひうちとみとやまされ

佐野布奈橋

舟泊てよさの舟橋

を積沿

いはすんあされはよむと草葉よほげるを

松鴻

すく車とふひようきりくちや風のあまにすく

緒絶橋

うの林とうなまく歌とおとだくすよけだ

三熊野浦

時の空ひよの衣のたまややけきりよきこまの浦

鳴海浦

もん人よだるこの海の八重霞すくとてよへえ

雜二十首

吉野川

うの川いよりひとす浪のまくまきつと我失れたる

鈴鹿川

すか川やをせよ波えうじ志代ゆ千代の青

不盡山

おまれゆうすの黒山とくすうだせすをよけく

還山

いはくよむとくとくがへうとすけいちとよとよ

海橋立

ひて玉ノよかう月れすし里ハけよく方あまがりと

明日香川

木

津多

立とよし
院

月とぞ持ひ
此彼夢系をうて月のれりも此身ども物のふ
つまふとあらすやせと
かのふくらむの身にうせり

歌
此こえりあらす
歌うす。あゆす、とんぼくへ 古来をうのゆれ
竹の白すうり きはなうりん

歌
此こえりあらす
歌うす。あゆす、とんぼくへ 古来をうのゆれ
竹の白すうり きはなうりん
経前既名ト藤原仲宗と御日吉千葉とあと
歌のゆれ

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

書
馬と鳴づきて心空自重して文字なし有りや
也ハ寔不手成ヘトと作

書
此此信鑑承
御定易口も事無事
不外有處口も事無事
不外有處口も事無事

書
藤原信鑑承
御定易口も事無事
不外有處口も事無事

書
藤原信鑑承
御定易口も事無事
不外有處口も事無事

書
法氣素、うとうの音、ちぢめはくじく

伊

さし石はいきなりあります川へせんとときわが

自羽

すととよきとえ田の草三ツアドリムく代の草ミ智アラヘ
辰市

辰市

吹飯浦

吃食口

ぬのり乃能よだとわくひてヨリ波のソラハタヒ
長柄桔

玉川里

て西よりやまとすがさねの朝乃と仰々ぬきまわる玉川の里

用ひと
ト

善誠野

角太川

あくさくあきがんすと
うそとてやうへもあ

卷之三

若浦

相坂用

志士の手に渡るやうに思ひ、さうしておれの手に渡るやうに思ひ、

まうとい　昔ハ今もとのりてこゝへきこうぞとね

春日同詠百首應

製和歌

建保四年春

參議後三位行治尼氣侍後件典權守長藤原朝宣室

春二十首

ま霞すや山の朝　さかみをねと雪とやく
朝日す春日の小野のそよに　まゆと雪下草
ゆき　冬雪するけの梅　うらゆくは
梅花　すりやいはと雲うるみのね　ハ雪とげなくに
じく三の半れまの風　あまてんそとすりて　せりあ
くとわくとめれの花　よ寫のきそとすりて　せりあ
わすたまたけのひく　春　けで山のあくとせりあ
峯　雪をくしん雨のけ　山へよどす花のまくい
けり　山のひとり白雲ひだつれ松　山　くとあ
三吉野のまき　花のをくい　そもそもうせす　くとあ
さく　花　くわに　山　くまゆ　上　あれ　くとあ
り千　うり　まく　春　のすく　く代の花　ひまく　花
花のま　一春　まけ　ゆ鴈　今年　うちれ空　だく　と
を　め　け　が　す　う　月　か　の　と　の　花　の　く　と　の　あ
山　の　端　と　と　て　く　し　春　の　車　と　花　の　ゆ　り　て　有　の　月
ち　り　花　の　山　と　く　ス　く　ま　り　と　く　と　打　く　か　む　ひ
え　ま　よ　の　の　藤　浪　袖　しけ　ミ　り　れ　の　が　ー　ね　く
ご　く　や　か　花　う　た　り　よ　も　し　く　春　分　よ　や　れ　か　じ

夏十五首

春　の　み　せ　み　比　翼　衣　な　ま　く　て　初　じ　と　ま　に　部　み　を

うちなる處や草葉より玉と今せまひの初叶のる
馬金の海れあひ玉をうなきもとすよしにしきれ
り山へまくわれと見えてもんはしやうてうさうと
與りてらわしとや白菊のりうち下のをまくと
う月れりうどんの下けもちう日れと雲へうめきう
う日月とよれかこま行きかくしたくゆ私のまくと
このまそ風のけたまつ見よそととおれとが

冬十五首

木枯の杜へまよのあざれくさくめ育む
ぬもし三の浦へとく舟よの本代のきいふき
まくは四方めぐるのをとだり行くれ君のうき
かきうひのひやま風のそひあくわ君の上井
きえいかりすかりとすかりとをだりやかり花井の浦
賓船のれいぬ浪の三まやくれとすきよ千鳥す
おとがりすのやすとうりとも氷とくわあ衣半
すみはくりとすまよもれあれがすとくわめ宿
あけぬとそほのあよとしますにうとまのを
みとくとれいりやくし雪の朝のいのひけうら
いとまくすりと雪をすまよのねうとむと
じゆゆりと雪をもむらは衰じ雪をすうりて
まよの霜とよの百羽しゆく鳴くとよも

冬十五首

今りおととす月の林の峯せうのたらせ
叶りと雪のとととととととととととととと
もうれとやう風の下うにとあるとととと
まよの霜とよの百羽しゆく鳴くとよも

終日月をうしてねども啼くやうに物思ひ
多き事ハ面影こそ玉うさぎむすすれども
袖ひし色とえはりてうちとなくかの御のまの御
いふえむしのとくにか草れはれまたな處へり是
じたせん浪うす神うちのがすにもかまひのとく
事と、魚とやまとくは春のよままだらまでも巻
石と、龜うるをの與ともまもくけ春の風
りくふかがひがひもやうなじうのを、はる
林よだづかじのすくまのたゆみけめは風きくとし
秋の野、尾花うすやとくし袖うすけられあひ
トといとゆてしたゆきもすやすく草と志やほき

雜十首

あけゆくゆく行けりてもたまはれ袖うすくも
もとものほよの枝のつれりくのゆくわくうき
うれうと心行くもし海とおれりとも思ふもそ
ふくきうとひてからといたる用とそもよくよ
きやれりうだりすう草あまれすうるやこ遠げ
浪枕とま風うくやう月袖の別のかたえかかなれ
人うりすくらゆめてゆくまのとくを峯れ袖のとく
玉うや様り人までてくよ國さんだち袖津とまれ
君う代のあられうるいはううと我をくみれすとあらう
いふえくらか新谷の木のうふ道のうう代の春と後
しよまた乃えこまそへきう代のうう代の春と後
はうの浦うりてうう行霜鶴のうううとくやすを
うううううううううううううううううううううう
先撰二百首愚哥有結番事仍可謂拾其遺文

養和元年全百首之初學集保四年書三卷之家
集彼是之同并居拾遺之宦政為此草名
建炎四年三月大司馬書之

建保四年三月十六日書之
參議佐久之氣使

參議治久之氣待後藤

用白居大長家百首

貞永元年四月

詠百首和寄

霞

すすりぬ山うだきよりいまと春の霞みとしと
三吉野ハ春の霞のたりとてきしむよきゆまれ
はれりと都のやをいすくに若菜ほじき春まきにち
だりとあひしゆ春まきはよ霞の浦めらうるぬ
ちもやす神代カタマリのよしやくすり
さくら花まき春のうとたよ日有くすとにかえ
ばつねづら花力ミシカミシカミシカミシカミ
雲のくらむまくにたらかくらはれのひけと至一
度の西柿さくとゑまく春の錦のすきと

暮春

かすまほむわうたなの年れもありへうけよ行き春小
雪とあつ花とひなまといがくとてまようとさん春のうらさ
にりそり春はれゆく一吹の花しれの申よけく
ちり花の雲ひるやーーあれそー今ハいく春もゆき
ますれぬやよいの空れうふどう春は別れ秋はまよけ

郭云

けもとあ、五月をけれれにれし年もあり
山へてあじゆく雲と郭を渡るもひし林もん也
あらきうたどりて人の叶ふるもまみのつゆすれ
袖乃番れれよやとかりきよす今立とき昔と風り

五月雨

ねきもあすさり玉ひとがわ育めし軒のやま
五月の日暮を雲もきされえらすも見四すれ山
そまむれの雲のまはれは中だそげよとくとよのけり
三輪の山五月の空れひまうら、檜原のよとくとす
玉れやがよだらじ川とうそせかづかゆ中た育めば

早秋

れどれ春ひすれ林ひきよてあくやがれ秋空
秋空の葉のまはれは人へきはたれのま
手をはげてねやく扇とまくとまくとまく

月

附りす空ゆ月乃私の事と、余與てえりえん
むしれ草にやうと軒端とりあすとく私其れ
長車の月とたりにやうとけやすれの事とだらだ
共に萩しなきよす月のまはれとて生れとこの花
秋の月なまきりのまうちあまうて物今り氣れ

紅葉

霜のまじよまでしきくとくとくとくとくとくとく
やまくらまぐてが草の下り行きよくとく奉れ葉
えれりく袖たなびわ私の月とましとぞしれふひま
高田山神のまげしにじくともやくとくとく錦とくらん
今も紅葉よか秋のまくとくとくとくとくとくとくとく

うりみて不きなる川のたよりがりにものあとをま
せた。しもはりてく汝川うちこあへよ。氷うちり
冬の半ねむれ恨みしれまきみたゞあらゆ神のく
祖のくわらとふとそらそく室山の月ひ
氷のさすよやまの池もと見だすも春のくちとまく

雪

老うく雪れりほ思つるよ今やかすなし
さつふねの雪くほりすまやきのるゝ山
磯上づ野、雪れ若くうづはり日粉と空すまきを
鳥とも里の名のやのくす雪まゆきをせねあくと
誰からうづとやけんといじまく東山の雪にゆく

忍立

自立れどくがり、ドリと見られずやしがくも
と浦、らや三木本代名トリてこう、ぶしき
不逢立

今れの我後朝玄

不きよひの長安あわらうこれ神、うりくらみれい
せきしれふとお別ハがくすたむしのくいは
朝あひとまれば神とたまうとお鳥とねがく
うりうりあややかくときめくあさまして人を喜び

遇不逢立

うらもあいと車のまれを、ほんとまくらへ
うらうら人の心ゆくうきくとくとくとくとくとく
うるりや鳥すゆくえぐがりよれしだかやま笑
海よあいとこれいしむすまくまくとだよる

こりぬて木きを川のたよりがくじらのあとをま
せたれしもひきくは川うこもあへよ。冰より
冬のせれすれ恨みされまきかねくわくわく秋のく
祖のくやまとふとそりそり室のくねくねくわく
氷のむすよやまのゆゑくわくも春のくわくとまく

三

老うく、空すらは風すまぐるめの方なし
とてふねの雪とけり、かくにわきのそり、山
礫上づ。野へ雪れ若くうそほり日粉と空よきを
与くとも里の名のやのそと雪とめきれをあさり
誰かりとやせんもいししまく東北の雪にゆび

卷之三

の如く本物を以て生れたる恩や、いりやうの如き
自らあれども、いかでござりまへりと身代りをやうが
之浦よりや三木本村若主とよかくわぬより

清朝志

今ち鳥の林とだれよき地とかりて
て來あわくらうこれ神、うりくらぬえれい
てふもすわ別よかうすたむしゆくし
朝あくらとすまれ神社となみうそお鳥よとなばく
うらうりあややかくとまくあうまきもくとまく

遇不逢立

、おもひをあひと車したのまゝに生きてゐる人たるさうな
ももうなう人の心地もういきりとてうとうとし
そそりや身すゆうううめぐれただのまゝ其
海のみあらゆることあれどもうまくうまくとだよ

又うらみ中山かくと又さきりあまさんせ

恋戀

あれのやまきとどうたよすも木をまうた
ありわをまふれあす中昔もすりむちうきうり
およこすもまのわいのゆよよみがくせき山とす
をり月はりしをにまぐれてしゆく神や道
道の力ひととき思草霜のよまきうちうり

桙音

都そあまくしの義よりあそとあれ
ゆりもととくの玉と二重にやまとまうる
喜よどぎ面氣すうきて桙よひ立れ道も多
をくまがれの山すすりよとすす月は桙
ねいれよひ山人のゆうじやまた
月よすくわはりやむくと南の山のましれ道
谷うねりまの軒のア煙ドリハリハスミカ
ミニタクシ山あれに木すよ袖の青く都よひ

眺望

きしきよとけりといふまわじよ山の背
よまく紅葉の金は廢にて奉たがなれ山が
泉川ゆきれ舟へてすまくとくにやます
ほの國へやく行今とくにしまれ山の雪むき
雲うゆがれ不まやまくひやかけまう雪の火

述懷

神風やます山へりりめん人のうやにうよまし
うれみくわかめりしれりすうたの風

まうもゆすねの藤の春日梢の衣をすくひ
そよすよすみの月もそよいと馬の初之
だらり称ひそよがすとぞあくすれ道ときらり遙

祝

志士のよ乃たかさかくいにだよれ世ハだやまきとす
霜雪の白つゝもてハけつまわる天のやまといとせよとまて
せよととがくら行のよて不ふ幸そんが君はよと
志士代とく方代とがくても何だよんあわくろ
ひよすもどる山のよ木の月日かげくえとかく

拾遺愚草下

部類圖

春

達五年夏大將家弓合題名
春二首のうち

志賀浦

こりそく春の初日ならぬ。寝てが覺てて。酒を
達久元年正月七日院より年始の予講され候
初春祝

初春祝

春、それから冬の、今までのひん千代のたゞ
松間鶯

松圓集

わの事も喜ばず仕事もあらずおもて道
あらゑすとある雪原をまよひ雪もむづりて
存うりてをかよひ立つてかよひまづん

正治二年九月院初ノ音合若草十首内
うち多ひきまのミ空もすりにそ風よきくもの乃若草

雲山菴集

之の御在よりは、たまもく
其後困居すしのありりうひましてきたる
人の哥よこす。内閣書寫

わなまくら風くよしもきわだきの空よキサヨ寫
雲井

卷之三

まもよと書けりのあまくもし里と寫さるるあまくへ

柳宿酒春

拾遺恩草下

部類哥

春

達久五年夏大將家哥合題名春二首のうち

志賀浦

こうりそく春の初風ならぬ露よが爲三さん浦なま
達久元年正月七日院より始のう講せられ作

初春祝

春よれかわくえ父のこまかとよもひん千代のため

松間鶯

ねのそもまへやけやシ付けますやどつよきおも鳴

朝若菜

露だらこのり春而叶ふもよののよるけまづくしん

正月二年九月院初風をす若草十首内

ちりそひきさまのミ空もすりて風よきくの乃若草

雪間若菜

片くそひの豆しらむれてほりとよまた雪もをく

老後困居院

のあすりとすひましてよまにあくまにあくまに

のの哥よみ作よ初風寫

かまくらかまくら

あくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

露中梅

まこかだらえハ梅の夕とすとにかひとうて立露のえ

湖色梅花

まこかだらえハ梅の夕とすとにかひとうて立露のえ

桜宿月春

れぞ草のくわいにじよをとすとにかひとうて立露のえ

三官より十五首哥めさりよ春れえ中

あす川とす梅のえに引ひていたげくや春月ひよく

建保四年四月内裏哥合春歌十首中

ちりすよキそさまん梅花に引ひてあくわ

土師門内大寺家哥合宴有鑒筆春のむ六首の中

梅香翁社

梅花ありとも秋のにひびくやとよまほひあいと

翠柳永家

うちみひ春のやうりやふゆんととの秋の年

内裏哥合水色柳

春の日よ峯^岸青柳うちかひきよしよらりる流の音

同上家會

あがねの花のゑに玉都下行ひしひりうけ

建保二年二月内裏詩哥合野不霞

だらりとよ犬の野りりあしに霞はたとひまれ眩

ねの雪さくねやいり春のえよ都のむくハ霞行比

建保二年三月畫目哥合霞障遠樹

こくよくよかくねのねの葉はくすなく霞まよ

羈中見れ

かり衣たらうにれのうけよまくもとうすまの猿

内裏詩哥合山居春晴二首の半

こよとよとよにとく春のまく衣くよき物のけ

内裏哥合平鷗

ほれむくすすう月のよしよがまくとすがるが

海色ぬ鷗

まのあまの赤やき衣たらうにまく春のうがる

賀茂社哥合伊弉諾日曉西鷹

花のむすえをすすめと金

暮山花

たる春の雪乃をあしらひにしみやとかかれたの峯はせと
榜政反して号と詩と合ひむべと同名と二

首よまとく

詩穂三也初也

山より
九角地未青雲瓦檜卷却翠屏明
此詩心事此年方概にト而說アリ
玉子

西治二年三月大工卡ある今曉霞

初瀬山傾月もあくと霞すりもくねりとて不

朝花

よのけひた雲と夕とす山榜今朝やじいの多の面

建保三年五月の哥合伊弉諾春山崩

花さり霞の衣りりひて峯向妙れ天のかく山
秀能ノくよよせ仲五首の中花序
たまはる雲もがりくさく山の春乃あそき乃
三宮十五首哥

りりちりりたゞやまきにんちくとこひと春あすけ
三吉野春花わいふうて霞のいまむれをすりく

建久五年支左大内もと今白瀬山

かひゆくと花のかりよなりとくとく山の春の時

同年二月内ある首よも

山の端どすそそり立のれりう花よのう月を

花のさりよ大丈大地そのうとり

かすりよとこくすれりよとく人のまれと

返事

賀茂社哥合佛事暁日曉因應

花のかみがりえてまくと有のとづけくゑそゆり金

暮山花

たる春れ雲乃ちあにいしぬしやとから花の峯を

桜政友して号て詩ト合ひむ下へ同じと二首よませ

詩數三や初也

後連に有筆也

花添山氣色

春乃花の雲れもひよろせ山がくのみふと空よろこ

玉もくわくしまうちたとやめにそり衣よがむき風

正治二年三月た太白あるる暁霞

初瀬山傾月もあくと霞すもくわねんとせ

朝花

あけのた雲と父とす山桜今朝やじいに身の面

達保三年五月の哥合佛事春山崩

花さり霞の衣りもひて峯白妙れ天のかく山

秀能ノくよよを仲五音の中花す

たまはまの雲もかげくとさくは山の春乃あそき

三宮十五首哥

ひやうりた。やまくとこころ音あらば

三吉野

春れやいよすれて霞のいまとおもすり

達保五年支左大内家主白瀬山

かひゆととおのがりねなりとさくは山の春の時

同年二月同あく首まく

山の端どすとそり立のとれりう花よのう月を

花のさりよ大丈大納言のゆとり

かすりよとこくわくわくとと人のまれとく

返事

大方れ春よすいをすひせたのもさうも行りやすまえ

殿富門院皇后宮と申す時よりそはよ
權亮大輔をとめて名花とよ車とよとしに
凡本、うりぬよらにさく花あすにしひとゆてよやも

建久七年三月用白坂宇治にて完花酒客と
よよととあす

春キその花のあすよもひれて左とと花被のうり

中え。女房舟してくと仰り

だつみとすすり舟の衣年よ花もさくや春よし
大内の花さりえある左かわゆとひよんじて

春とてゆきよなむ花のキナシがよもあれよ

建保五年四月大院と度申立首玉取

山の花の室の花ようり花よじく春はす

建保二年内裏詩哥合 河上花

義あそばれし夜よすさめえいくもよ家法の蟹
さうり川春の日すおうて花よぞしもせせじりし

内裏哥合朝あ花

度セヨシウジのさく花朝あせすまゆり

同詩哥合山居春晴

名もすり峯花もするよ山林のあきうの室

建保四年四月内裏哥合春十首

ちうれふ雪のこもすとふのすに風よきとく

正治二年九月十首哥合あ花

我きけりあとだとだとすすむにまうひの春と風

院詩哥合とめきとく水と差留 え久の育

宮本りりきさとの霞などひそと音もさざれ花うれ
わらぎよらう、ときせりまのよしよ浪えやへとも
秉久え年七月内裏玉名深山花
山々すますとくせのりりゆき霞よたひそにりひり

丙子年七月內裏重看深山花

暮春雨

萬の事よりすやたらん雲はあまむき春め此うれ
天皇御代文元年正月

左大臣重衡義久三年正月

たまふるもんと重複やとい春やよん手

卷之三

八重さくらの花
月夜の月光に
梅の花
三首の内野花

卷之三

見方川峯トリスリテ、れにシのトガえやせ

方丈の櫻文に就春風の聲すら草木に化れや矣
度上花

詞中花

權大師言家九首中用詩記長德二年
貞之應三年

立田川山家
土清門内大卡家哥合水多躊躇
主音首

古文獻

家のことをなぞりあわせても里のもう一室を

宮本りりきさきの霞なひまた昔も見化した花あれ
ありきよらう、さきをむすめの、さと、娘とえやども
秉久元年七月内裏亨保山花
山下すましゆくせの、りりゆ、霞よれいをにりひり

暮春雨

鳴の、あら山すやだらん雲はわすゆき春あれうえ
た大吉反より八重桜たまそ秉久三年三月

たけくわらぐもむか八重桜やうる春やすすす隠

山中

重さくやとせうらむれは春の日を光りよしん
むす三月、内りうそのてみざれ三首の内野花
かくじうじす、年代しまくさく聖の、く。春の波

海霞

凡き川本トリレレ川桜花にりいのうちれえやせう

野牛花

すまし桜えに春は、聖たす草木はれや等
庭上花

月草の、えすくようて、てもううるよ花まく

田中花

ヨシオセよすとす、はなて、いく春風よ花のうえん

權大納言家五首中 用野花長徳二年

まくう花の用り、よそへゆくしが毎日しやんみり

土清門内大吉家哥合水色躑躅美膏

高川岩林の、一ときやくもとあくふまの新

古歌歌

山の、えくねえ、あむれうそ里乃、じつ、すうひを

雪中藤花

立ひておとせわせとも藤花春へくへぬよまくえん

山家暮春

うる花は谷乃共うめとだして今より春と立ややくも
三位中將公衛三家して様宿二月盡
いがりますと山よりゆ霞たてつれすくする春

复

春後思花

早よしゆやよひの空とすよそ青葉にやうも葉と
けむ初か

まづりやますふよあるき郭公ミシヤもしな雲代さく
土浦内大寺宇相すゆす仰叶音のあすま
せん例ナリヤハ花

おもひやうかり你の歌へあすく第よ君と心よからず
恋事

送(一)伊(一)

おひ草むり你の野色外れしよだよとゆよがきよせ

建保三年五月秀吉不々食夕早苗

あす玉乃年ありゆ代の秋むそらやまとすよもくつ

建久二年大寺宇家又育文

あらゆくも人ハ引よね在りゆ山風寺上町のちを
建久五年民ノ經房家之を初郭公

かくすよもく松下山風寺二月トよりく、とく上

三官(一)十五首(一)三(一)五(一)文

うつる霞と霧をたかのわ行のあやすあきぢり空
時もくわく(一)いはくせ郭公たす月(一)室よだす

院小面にて角せり二首昌蒲

年少し竹もむ岩井れあや草なし我よえやむす

時鳥

まちあすさよれすひゆく一と角すを引くすす

建仁え年三月盡日哥合雨後郭公

五月あきうれ月にあくまはれやありくます

正治一年二月た大長家哥令ノ郭公

郭公だらんときの雲またうござのうてもやとひすす

五月雨朝

玉あれ行はまどのあや草す月をすあくじくかた

庭え草

あそまたのあとなたゆをせよあもしすとまきえ草

建仁二年三月六首中衣

秀能立首哥中郭公

大

建保四年六月内裏う金千首中衣

だりとめりのれいとひて叶ひすよくとれどくとん

水湯草

かみ称せ一玉にのあよもくれて私のまくれ風すされ

建保五年六月大り度中立首夏曉

見ぬきりゆくはきどうはせうわのどのれともいふ風の

建仁二年六月和室中立首夏風五月

田吹がしきあいのよろく月をすまの私とおもひ

水風曉涼

たくらむぢりかく風のよれにすれ秋の印

院小面にて語り二首昌蒲

年をれけもむじ岩井れあやう草木、我よ又やひまん

時鳥

まちうすさよれやいゆく一、上野を引きます

建仁え年三月盡日哥合雨後郭公

五月あらむうれ月りのくと里かれやみりとまます

正治一年二月た大長家哥合ノ郭公

郭公たるときの雲またうりよりかのうてんやとひます

五月雨朝

玉あれ行ひそものあやうす月のすくわくいくがれ

度々草

あそましのわとなたゆきとせよめしすとまち度草

建仁二年三月吉首り度草

秀能立首哥中郭公

ひすあらむよきのれいすすとの育くよもと度草

正ええ年七月内裏哥合膳叶鳥

水邊草

かひせー玉にのあくとくれて私のまやう風すれ

建保五年八月大り度中立首夏臘

うたぬきりゆきれきとうは壁すりのとれもしにま共の

建仁二年六月和亨立度草木五月

門吹やしきものよろく八月いよまの私とおもき

水風曉涼

たくらむおりかく風のとくねほりあふ秋の草木

建久五年文左衛門家哥合龍田川及

坐すわしをすゝ高川又とれをとくかすかと

名取友月

就きよひかづの川と私けとすすむ花をすす千骨

山納涼

友の冒れますとすすむみつき山ものみけとすすむ花

權大納言家海上堂

えりやよりわらひをゆがひとめ思はんよりもう
建仁二年六月三日せのぼりぬあき給て六首の歌
とひて拂製す合ふれひへ中より川上友月

だせ舟をすよ川のうねさううあもあくひの月詠

海色堂

すの角すりひれまよむらわう御のまちよよあきを

建仁二年三月畫音哥合松下脱涼

こころと交といたしはせりも山けとよ岩行

松政友詩哥合火色涼自風

雪よみたつ白鳥笑まきと私とすすみ詠のひもす子

友衣私よだれあす

建保四年四月内裏哥合友

友えりひきよらき川の岩浪くわがま

秋

松尾哥合初秋風

建歷子

あたまのくじらきふくう。波すりと木の上風

建久五年文左衛門家哥合秋之城野

秋のと森の川のとよさくにそりとたりのまき

阪磨用

せやくれ秋やすひすぬの角浦月あゆみのまよ

建保三年七月内裏七首

天川水け草のうらかひきなのかづこもあこりう年
天川あきわたりもうじろひて月のうゑをよしとゆく
天川ふとみのそめの秋風よ雪の衣とたにやどえま川
天川てなましゆにてちとなのすきうちくはいただくせん
天川りづちに橋乃ゑす見よ秋まじ神のれとまぢ
天川あくふ名たもすけちれのすれ年の一年と
天川あくふ名たもすけちれのすれ年の一年と

建保三年二月内裏七首秋

開草丸

よしとゆく

えええ年七月宇治侍幸

限山院

かゆううたすとのまよととくに浪うれ秋のむねうの心

建保え年内裏詩哥合野介松日

もとまがの玉ねきとみの秋風ふくせ、ゑく夜の上霜
さみれ、草のたゞへらんいかりれ春、ともせのう

同四年四月内裏哥合秋

きくまうれとのあさらよくあく草葉、あまく秋草葉

建保え年内裏哥合秋ノ名

ゆくの草れ、りのれのれ、ゆくのれ、ゆくのれ、ゆくの
建保え年七月和琴不吉合朝草花
あまく下草す、草す、草のえよがりば波をよそぞ

ゆき月

りもじ神の月をあいとよくあまくすぬの浦人

建保八年秋あまくよみげり中

さみれ、早一うのすく、じくとき空れ私の草月

秀能より手せ作 月考

林と少月のだらう風の雪とすとのく方れやま
移政反詩哥合會月の風又冬冷

雲たそね月とて風ふくらむしらみあらむく
さむくろよ物霜もひく風とえよ吹きす葉月を

西治二年九月院幼友う合浦月

あらま月のけとしよなれかきとさゆすま浦を

建仁え年八月十五日す合月夕秋友

千代よき玉のきりれ私の月をす先のとを下さ

月赤ね風

よへづりすまよつて月赤ねとよ月のとくと

月前襟衣

竹風と白いじのあらわのぬすま月のとくと

古寺殘月

そ浪やちうしりすと見て鏡のふといり月け
古寺殘月

深山曉月

鳥のひをきくわふのとく傾く月あまくとく
野月宿深

と見るすのくらりとめの月あすかと月をく

田家見月

まくのまく下田にむとて月をしとくのまく
河月似水

すまやく月にけきよもとを川むすあもと水を

建保三年八月十日午内裏月前竹

月きよと玉の夕すりと竹。千代とすせむ骨もて

月前榜衣

月よし民の衣も金とくと國まへたは代をきこゆり

月前眺覽

さくさく田のと、うりよ三く雪のうち、もまくらみわの身骨

建仁^永年七月十三日、和子下南度湖急月

さく浪やミシシ浦風鳥^鳥だくと東やう月、私の身

え久え年七月十三日、水月

えの海やさくとてさり、ひの月^月くはらせくとく解

西治二年七月十五日、もと合山月

あくいの秋^秋たわとア伏との歸^月、ソソク

建暦三年後九月内裏哥合渾山月

さかの房とくふと道^道あれ、枝よし葉にと月をもとよ

初秋月

さのりのりシヨミのよの本^本と、新たにそやうす月

仲午月

秋の月^月かふのさくとく、またいとえりひまより

入後月

物^物と小秋のあふいすくとく室^室け、月乃西そく

内裏^{内裏}じそ禁^度月

やまとすよえり、霜のすに東よすくある北の上月

建久二年法皇極露寺^寺よおりまく^寺約^章の

ひきかけの使よまつと

さの山千代のすき通り、さくと又病きうら月^月とこぬ

九月十三日 内裏と山河月

八月八月のさ衣もととすみわ雪ひのみましもお
玉や、乃道やりあく春の花それとまつて山の月を

建保二年九月十三日 内裏月 前風

すゞや長月の重九月氣とちりふやうの月の風

月六年八月十三日 内裏中殿妻

秋良侍 妻同詠他月久明

應 製和詞

奉議正三位行民公金件与權守長藤韓室室

俱千代とよてうづくらみうじと

とよみぬよ丁づる月け 三行二字書之

神主重保賀茂社哥令とてよませ行月

元慶文年九月侍従

野宿月 権大納言 負應

夕暮乃引り八月とある。一にしゃくとくとくのれ様

建久五年八月十五日たとねむ見月思様

あひとどかく八月とある。もとまきもやなしあきよ

對月回音

すれどもうとうとすみの空月とすみのすりゆ

月與洞月

月とえとくとましれよよかすと秋の空をなで

え久え年五辻坂山からのは初て説せよ

序通具御續師太鼓奈松間月 應製上

木はまう月と千年比えりて志代うちうゑの若松

野邊月

兄弟の六月す峯山ちましハねづらうむ月の草

田家月

さるいとれすひきよ秋の月よりとて十月れども

羈猿月

草丸都ととととよくゆまく背筋やともうる爲

名取月

里かすりわゝまの月あれ私の身は今まの浦

同取南庄

八月十九日既月應製和寄

臺位下行在近未權中將龜養農守大藤朝室室

あい代へとひをうそよの月かハ秋の名ハナムニ

建仁え年三月盡う合湖上秋霧

き良やにりの湖のわけとむ霧つゝしゆく花見月

○建暦三年後九月内東う合寒牛

九月十九日既月の本日ああるくうしもくのう

建保二年九月もあ下玄行路軒

うやうそとこの白鳥ト四方れ草木は又うる比

達永え年七月十三日和哥一月南庄行後

王不ふやくてのをひきちらしてらうやめの草

西山二年二月左下あみす

うみすのまくすときへしきとする私の中

え久え年七月宇治作幸以度

山のをひきものと玉ねぎの草

建仁二年三月六首秋月

霜まよ小苗ひかりのまじへ月とわすよひの空

建暦三年九月十三日内裏寺合は上月

さかえはよそくやこ乃花白妙れ秋見浪とすすめ。　新

暮山松

秋のわせりかくしね峯のれ四氣本のまろはもあひえ
え入玉年院詩哥合山詠秋行

元久五年院詩可合山詠秋門

都より今や良となりの山中霜月の一大道
中古といふまれゝも初鷹乃すくや雲井川峯のかきは
建仁三年和哥所立合海老鷹
ゆきられたれどもくわん浪もさせぬまゝに

建仁三年春
月夜合海を廻
りたれぬとくに
うん浪もよせぬ
三宮より十五首
あめさへ私の哥

卷之三

久方の月の下りてや。秋も冬もそゆ
海の木は葉時とありそぞうきとれゆ
達久六年秋の比大ね反して未句十首と
翁もじ

林蔵 聲
さくやう霜のむづてうれしくせれのよとく

秋香

かみをくしゆく私としまりに生むじ袖よしと白菊

秋情

雨なり。木の葉をうふりあわしてさきづらすむし

林立

うりき山鳥の木のひづれよ私を翠すむに水よと

同七年の秋内太古反て文字をかきよと書きサ

首方中よ秋十

とき原むにすとのぬれりて一叶ばかりに秋聲吹

峯よ月よそよ下葉一葉のよと私をきこゆ

なくせど私のりきみ、とくくそよしのやよの葉

へそゆ露もじ數もよきれりやすやまゆき

えきく乃れますひて夕暮のがよだられりのれ

るやせ川シカヒタリまたゆく浪のこすみれどちにれり

がり鷹の雲ゆくをひよと霜のこじきやくわすめ

まよゆゑあまれ衣てれくしていり、がくし病、きし

内裏歌十五首合秋風

おさまほり民のくさんせよひ田のすれの跡

袖立す音すりすりすりたゞくとすれてもきの音

秋月

いりはとよみきの山々と空よむかく月の鏡

花、うれ衣のえよむすすす聖くよがの私の身

秋花

様衣いもうたのえよむすすす聖くよがの私の身

秋鴈

こゑのりうれはるかにむかひしも峯の紅葉

林虫

あすく風たけにとりきの昔すよ。さすまゆると

秋鹿

あまく木のまろうりだく度のよしりと見ゆる

秋鶴

れんづかすとみる谷のよむすよときすすむら

秋霜

秋のよよのらかとみる霜とたゞく草禁物と

秋祝

よ老せぬ年代とせきよとてとめれりうす白菊の花

秋思

よだじせすすむりようこがりとてれやうゆくへうえ

秋誰

わらぬや秋うたはされ良聞しきよおむひの吹上のよ

秋雨

仁和寺宮より此のひてきりれども青葉入六

秋花

れのくまととくあれ行雲よいますねばうりと

秋田

かくわくわくひきの風ひとくよたのく吹くすま

秋霜

せや、^ハじに霜うり霜よじもひとく木の杜のむか

秋祝

東時あさよりしむれ秋のとねする君代えをき

秋憇

そしれとくちよすれいよわてまうにせ

秋夢

風さく萩の葉よとよもかへうれすくちも

秋楓

良きふゆの浦れ秋の月やとかまくにまやと遙

秋恨

心も代に昔やすらぐもれのうとれくす葉

秋雞

あり、いく代の人のよし、天川原の川合ひ、
やうに、とき乃白あまきと力かりはれとみの勝ひ
やとれどり、おゆのとれふかして、くじれわの裏
よよぐたれぬうとめのとだやまあ月よ夜ら
まよつる月しづるふなげれとあとて長の月を
いぐう梅と八菊とさくらん霜うり霜は神志り見
うとくうせやくをかぎて思もうちれのほと
龍田山中りをうのたくとあわせのねのせきをや
山姫のかくよえり紅葉と秋と、まくと四方の見
建保年又せぬけと傳せられ、竹青雁鷺上
あり、かくじわまれとあるてへ、ふくまくと、れの見
あきよ乃と、まくらをいきをすくよ、背をす
大とろねと、あや玉子と、オカフをうちて秋に

父叔とたて余れうして後すみ月より
家本邦へりあれ君のまきしれ玉をもる
里りくひひのとらすにまもるきるきの家
高砂氏かにわらう物と我よりを鹿だくす
川浪乃くかくとくれ算といにらむとまむに
まきもる我方時のとよりやけはと月口打きれ
霜乃そよの錦とくろとてたゞ御もよのの内整
兼久え年七月内裏哥合

用榜衣

さしけすく吹背も打すくふれと小衣

庭紅葉

りふく木の下すくちうだり我そのせ行の筆

用榜衣とすすまどくとくとく

兼久え年九月日吉哥合と内うちお通

深秋秋月

大方氣（も）も雲もすまく空（も）かなるものとく

遠山曉霧

むかする鐘のとく霧（も）そとうきれよあけぬ

暮天同屬

おりひ乃をすといそくとく昔のとく今之考

紅葉涼雨

うちあら涼（も）しりうちりりく候（も）くまなる秋の考

建保五年四月吉日序申五首秋朝

とく山とく比のあまく時（も）はすれ四方（まぐわ）りく

兼久三年九月新羅社哥合とくのよ

紅葉

霜月一たる錦くらひめわらし神もろはりよ
内裏も朝見紅葉

すくまのきびさまりあさり山にまろ病ひふる

建保二年九月十三日春内裏。山紅葉

せんじく神われ坐つて人のひるいぢりあくね紅葉

對菊惜秋

ふせん菊の初ゑしそんし空にちりむの日數

紅葉見札

音川おとがわの水乃くはせりかしてそやき秋のきか

九月十三日侍奉詠三首

秋山月

きれいしやよてる月の十六日より札の不き

秋庭月

雲の上をすさん私もすくはりきよへをの新酒ういしゅ

右大吉家六首哥合おなじ月待月

かどまのたぬますひきよるかす山のそと月と懐

故郷紅葉

らうの昔の都との多く行き後をさく

川邊榜衣

やまと川こひだたれりて表おもてとゆきつらむが
え歎え年寧相中將通親おおきにの角榜衣
さんまほりきとうてら衣きぬをひくとせやくと

冬

正月二年九月哥さき竹時幼人

こう比の冬日敷の春るく谷れ雪けよ鶯トリ、と

時雨

山々うり叶ふやどらふうへと雲間まづあひの秋月乳
兼え雪年十月家長朝日吉社へ誦す(きよ
一叶一叶あちけぬ)

もじ雪や風よすせてよそれ草の風ひうちまく
時雨智_松永家

いじりに風せうりきりはす月だまことうきれ
寒草継残

うの風のやまとすみ葉は下へり霜をそな瀧_{ミカサ}冬ま
建保二年内裏三首時雨

山方け比_{シテ}くわれしとらうてあす、行れ聖_{モロコ}え
水鳥

池ももじ有の月れあうよしだれ、名ちくくはむを
西治二年十月一日院内會角辰_{モリ}朝

朝霜のえよへう思草_{キテ}す、むきの原
建仁元年三月廿日_モ合_モ嵐吹寒草

わきうやのる葉すと秋の霜とま下り吹あ_マ
建保五年四月内裏_モ合_モ冬哥

ト_モがくミ_モ霜_モくらみて林今あくろれの菖蒲
三官十五首冬_モう

神育くわやと見日のえかく霜の下草に風なま
立_モきのあふのあくすとまわんゆ此の雲は冬それ
二治元年十月七日二茶石彰_モ合_モ紅葉残稍
冬もすく叶ふのえと惜_モて初雪まみ峯比一もす
寒_モ单理火

らみ火のまみえとだまとまく霜さゆるごのさよ

文治三年冬十月二仲トヨセ竹 冬十首

喜ひきのれ爲も霜下さかげ 打よ冬半にけり
やとつせ都の角とくのつの さひめしをの月礼
霜かきトさき、松かははまつかはは 雪けよけり冬め着簾
雲くも 本ほん うりそら生うき しゆゆ よりれ里さと すま枯
かくすよ冬ふゆ の中なか ふくらむすわすわ せよと
こけよ化か やのとせ井いの ともにきき やあうてう せと
浦うら の吹ふき 上うへ のねね しことあまうう きき と長なが とくら
をとてん余よ すすす 冬ふゆ の雪ゆき と月つき と我わ ひりま
空そら とそえこくのいい きき み日ひ とお雪ゆき あくあく だにき
えれぬすくしすくし は鳥とり はくとあんせんくく年とし
とくとく とくして後ご 川かわ くくとすりたちたち 霜しやく 月つき 即即 日ひ

すまうこりやすくねすとせうてわうえ空骨えもん
建久六年二月太夫将家五首冬

霜ノ上ノむけの手りたく
西清元年庚午家冬十首之合寒樹文右

池水半冰

卷之三

用行書朝

雪のりますぬ乃用やれどひまつむ行月も先トぬけど

水鳥知主

見事にてふれりとからひやうすれかへてやよのやわや

猿泊千鳥

こむすすとまうきいきとぞしよ又鳥千鳥も

湖上冬月

月、うきくわまのう舟水、浪、さとりなり

爐邊懷旧

ほくくくせす風のそと、昔立いたる木大木
正治二年、内院よりて哥合作、水鳥
えす冰斗、鶴のあくよう、つる浪の音をうる
同年冬内裏にてひ中の通具朝長くつよ
よませば、一、深草水鳥

うちゆ、ミキハ、といづる、がしよしのえちきく有の胸
建仁二年三月六首冬景

月の上、まようとく霜とあすはる

寒風月

老後私家

扇のあい

行ぬ露

冬の雪行方、かやうくあくよび

遠村雪

かくもすにとくの竹の雪行方、かやうくあくよび

建仁二年三月、ハラハラ幡平合社ねね

秋葉やねとて、かくもすに霜がくみよせ

月前雪

さきうち雪行方、あまきらぬよ先

秉久え年七月内裏哥合、冬水月

天川氷ト、もし風も行すまじ月の

杜向月

高

初雪れりややまとだじきすへと生田の杜の木里

西暦二年二月左大臣家尊合庭雪

そむきしもとあゆくものまたとてりする者

建仁え年二月盡牙元雪似白雲

冬比朝吉せぬ山の白雲も花むづり行

雪をとも尼

核政左詩哥合 雪中松樹

低

花もくろ雪も日暮しひづらせねの精ハ春乃青柳

風はまのりとあくれば花の病かくいくよつまことねは白雲

秀能立首うう雪

やまにせ初雪立るもくまきせさす橋れ有ゆの月

建保内東うんナ首

中

建久五年左大臣家尊合深草雪

雪むれ竹の下道わとこかしめり一はくすくま屋

文治五年二月後京核政大納の時方十

首哥 林下度雪

まのりこ此核雪すうて春見もむ雲むす

高雪

山人ひ先だいゆめりやれにまきだる志兵の

家雪

も人のすと道がたとし竹端れねよ雪林

野亭雪

雪れオふきていとくすりにけりかむりをなむ

社頭雪

春日山有ゆくの年れ雪。うて春の朝りハ神せまつ

古寺雪

うへきち月の三日、先めて竹のあいだに雪
雪中寢人
がきくすゆへの雪よせまもそやこねがひと

雪中述懐

群山より年あんしはりふかせときむ雪とさを

雪中遠望

すりまよ雪とへりそつと雪なるとあらあまし

雪中様

うちもひやとかりわの雪たぬあい下道なかりて

建保五年度中冬ソ

うちくひ吉野の三雪、ぐると春のらきましの里

母乃思

こが里はまへきのあくまく、自雪道とて
有りへとと志とたけの雪よ、れもうとまひれを
きりすとひのれすとひの草と木とおれをわづけと雪と

山車

西のえととく春竹しきとやすり、雪あまも
もと今心のすくとかー枯れ雪の庭一村
の雪の雪ひくと春やうあし、竹の下さきのけり
竹下さくとみどりと我うじて雪よへうふけり
袖の上、雪の木草にましめひひり友すと雪下ふ

正治二年二月左大ト家哥合冬述懐

いたまよとくとくねま、冬をまじとくらむ
えり形とたちとどうじきと來よをすまゆら山車

松竹霜

庭のねまづの行ひと霜力未だあらす千代の多

報恩會の行ひと歲暮本據

思やれよにり霜雪じりそらにちる春乃まうも

むすき會山家懷旧

むすき山のあそくし等よ人さりよ記

同會よ風暮 美久三年

いきをせわした思あうすとてがたりともなる年は書か

賀

建保二年九月吉和琴形月契千秋

夫代八月と私とありすよとくや木草の寧の鳥

建仁え年鳥羽殿と始て哥謡せられ拂遊

より侍し

東池上松風

秋乃池の月よすむなりとの林と今どうあたはる
東哥合

正治一年二月左大寺家哥合

ねせりとまみれとひそ花もぢせどちまくす

建久五年左大寺家哥合 祝春日山

春日山峯北朝日とまみれの空とのきに万世に之

建仁え年三月盡日哥合 寧神祇祝

あとたれ四百社もまよしよりかあ千代とさく

正治二年九月吉合十首神祇祝

志とまよあまとゆのきやわい先すりと松葉舟

度舟

松浦す玉れよきのねばくと年代重よぢりてくうし
建仁三年十一月入道和すと牛賀たまよ 鈴木

君はまだせぬすむにあらそれうりて可代や魚也

嘉元二年住吉の哥合

仁和寺宮より 寄松祝

建保三年五月廿合 杉徑年
たもせくとあいへ代興をまねしめもあらず
一条の家にて始て、裁ぬといひとくつむ作
七十乃となりと立ちやとふんで千世のよしはねん

れり風乃よりうとうへて千代の後入合のす
建永二年三月

志代ノ千代子子代ノ吉郎也すひとす賀様の

皇居宮櫻亮公宿
朝たゞめゆきとしま
トモリト拂翠御幸
は萬の下さるキテ

自菊乃称ひと見れどもあらうかハ根元子にしむ

١٤

たる方若と有りて是をすれども其の行
が將よりなりをすと考へて内中おどりよしと
ありてより身たたりしに比三日とすくして
それとこそそぞれは日數にとねよん乃々やあん
前さととくぬけのりのりすゆくまうんもタヌミゆく
為取え服をちね従上の御子おうちには既經中ち
被おうちに思ふれてしもくとすまつては

セ

袖せくくくじかよとあまくまくは春トテハ六月
同中の子やうきをうりうりうらからキ本れで三紙
あさくわに思ふとぞうり君よかひあるとき一曲の道
や

セ

此道もきよひとまつまとくまきれとよせ
年、えのとむかひそ辞申す三位よを勑す
き作事はーへは後をひとたひと申てや
れたりしよねり中侍

セ

此音作は袖とりもとだらの軍令やとす
や

小き昔れ努力若手けんきうよあま葉の文
官内

セ

一に思ひ所りし奉議の間よむくく空萬
とみとよりし作朝 官内

少て思本そとおはやあましよひ花のせ
西

セ

すよだれかてのよとまく花よひえ
水草頬ゑよあくく腕がくもくくれて故
まうてうな清氣朝かのよく地形勝地のせ
トトトト中

セ

うくくれかとせようもせてこと意興半ば
春日野やまりみのちうと都れ西もとす
志代よせんつとを行ひよ若くすよばく

院佛兩育度申扇今の下にて左方北扇

御詠きう三条宮よりえひづく清院朝

申一六だてまりア

木さましろ代よりまの間かし室荒草榮もとをひ

二条内ちこのとじそじて年けウドー休櫻
百首よ右兵くともそ引く右兵清院より

てめいた

かく木キよ若葉はまよあ志れけ志意も

セイ

女侍

春ノ氣すりゆき立ノソミモ志意杜ヒギ家
祖父中納言春日行幸に賞とほのりて正三位

たら朝り

右兵侍

セイ

神も又ただも春日山方きゆき風の

セイ

セイ

人ふきやれやすし志代ひとりをまよひや
右兵家傳子よかねのどうくへよ
みきよこよまれねよひそりあそびくみのよみそく
セイ

セイ

セイ

辛代内春指記やうへんみよせ山乃く見えよる
日吉神宜親成寺千賀より考証アリ、時
をそよそんとせだみよね千代より父が

同千賀

きよとせやうれ坂よらましと神乃く見千代より荒

元久三年八月高陽院反幼度

應製庭花春久

わがまろ年めくせの春はまだ見てゐたのを筆

戀

建仁二年六月火を燃へてててててててててて
に小六首別をひきとんどうてうまきうちじゆ中を

春やとまごそりよす一寫のえりふと我まよやかほ

恋戀

友まれりきをみにまも林鳥をきとそく

久立

日中はいに田にまくわせりててててててててててて

春立

手代やかよだまよ春霞をれとえりよ

友立

こし霜月やあらわすれれりうるくうれなき

冬立

ここのおれ乃木きてといひむじとひとむへれ等

曉窓

西東しちよしむすれ興とばしすく見ゆ有ぬれ月

暮立

かくいきまことなまく雲ひまつたゆくれ未だ

霽中立

志るぬこのとつて一族衣もひあても高ぶれ

山家立

風すくすくあふれねと舞さん人京都にてす

放立

吹きすきすくとせりと春の音がれぬれあまのま

旅泊憇

すすむは浪徳ノ月よりてすとしよまくと

用詠憇

すぬの浦や浪ト西氣たちひて用詠ニ西風を

海色立

別の木村さまの神められて又ハスラセといはるへ支

河色立

さくら川よりもくらきもくもつ神のたゞ此御山煙

寄風立

ゆく三さき風とて三ハ度のミヤのやうれ村翁室

寄風立

鳥の神の別よ

病むておにじむえれ軒風よ
建久五年友左大内家哥令支立

正治二年二月左大内家哥令支立

よねむるる雲れうごとれまく

月とあーと立川

宇治翠

東立
え久之年七月

まぐ人の宿月とさとまく里の名はくまかくちの神

建仁二年三月六首乃中憇

たむし東日本の一月

じりうひむれ私乃父とくそて
遇不逢立

美久元年九月栗田文平公寄月立

やうりう秋叶がくはうにあくわう重山と月立
やうりう秋叶がくはうにあくわう重山と月立

三言十五首立方

鶴の音をまかげてもうふみすすきとく神とをそ

大方はやましろとあります。又有の月野はひどい
きよれとましもさりとて森とれ物おとせり、

建保五年四月度中久立
立タケルの才れりたりとくの事
毫之二事タカニシニシニ事

建永元年七月和帝被忌立。荀爽

建永元年七月和音前被忌立南座
建永三年^{三月}内裏遣云三首

建曆三年。內裏應元三首。

ちまうりれも、いきなりそひうていたにあらへどもまかう
かまふたようせむす（田川）よりよしはけみへきわと
建暦三年九月十三日内裏哥公様宿立

建暦三年九月十三日内裏御
様宿主
を。他の中道や玉うけ二見の浦へ
建保四年正月六月内裏哥合宿

建保四年六月内哀哥合宿

人へはよき復りゆくものあまねくわと稱をのぞむ
達保四年内にて寄蘆庵

建保四年内にて寄薦

正治元年冬大矢家冬十首う合契、歳、亨五
わく十九年のくわく大空ハアリモアレハアリ

たま年のうすり大

やうりせしより、その兵の魂をうそと見て神の又立
戀不離身とする

仁和寺宮花立首寄花立

建久七年丙午大和ノ月一ノ日
トキニシテハ字をかによとすと女房

哥トモサヘヨ言ニテ日かた木もひ

望み給ひしれむ乃肯のにてにこりぬ人をす
なまけられり行徳の匂ゆさもあら花のえをすれ
なく見え思の山よ道と我ほのさきだりれ
りすたれす風浦浪たちうし人の枝やかくあれ
ひたくこうすみひととふかくにまとうとへ
されとなやせりすみんしまくがくんぬめにえゆど
建久辛酉月左大伴家五首立

中納言長方五首すよを仰中。絶久立
多ひ称たゞんじてスレ仰毛と見立
達保右大夫六首す合行路見立

病れどくおそれきれひとひじめのへまゆすと
山家感

夜長増感

秋の半比鳥のそよハ吹竹なくてうくくく
寄巣立

く身比風すますきうなより、と行へなれねも
忍待感

すうじ千せのそよハ吹竹なくてうくくく
寄巣立

ハ又あまふ思ひもいきみ神の下られ先見えても
障遠路立

たれぬとこかくい用よ月、うそあとまうの道やは

暮山感

桂大翁詩表

しれせうるやよりくあやれすくや／＼とまとのう
貞永元年七月大暑十、感十首寄承立

秋草に露も夜木三十せし。伏せぬ袖ハテナムモテ

寄鏡立

水代乃へれまうしわのえびす

卷之三

者立

詩
卷之十一

わざとよそへおれども、おまえの心は、

寧絲

友川の日記を書くにあたるに乳子たるに付えども記

九
神

宋綱

卷之三

かきつてよまなづかの立教ハ昔やより奥をもん
寝哥そぞ

四
三

うへりし人のタマトモレいひうり寺
かとときを浪行身よあゆみと同とまくよ物事に比
せじびてりいき興あくわくすにわらひがふくらむ
なげくとこうとあん道やまに君のりまはまは白雲
あたの羞葉の草むくあれ神よなまよおとれ
よひくうわふくらむトのまなまくけてる

神子月比口主 いわて

三
あ
て

かずやみたひもあく ゆゑ月林ねれ室と萬の室
いじどり人比の比とくわくしきう
きやまへてそぞり春霞それぬ旦ハリとわく
ちもあくまひたひ人の梅花とくせてう
よきかえり おう 不ん

人をあくびたりの如きに物有るれども

我がやには土のそん梅花より
新錦れ毛皮肩
かきえりそがりけり道も火れありよ
くばりよ
うへくわすとあまちくさる聖や空よ

ことの事見て心がたゞ思あうてつむるも
まことわざやうにかくのうれしきと見る

ます。今やうに一言ねんやそが見えぬよ

四

おもかくももとをまろみ二入也此事不本
れの事とひやくはりこゑて里へりてけん
いにすんまくしれと事ともあらむ行き別と
うやまくとかる未てようけ玉は道まよえ

わざれ称よ辛ひてくわ秋うらもあは立若行き別と
むちづくふ海せりの神の上をそめ玉とたし竹のすん
わきすくとせよ うとまも三位中将

夫すそがよ人をとど

所用守よがとまくす

ゆ

立そふゑりれきよきよかしまだくふよよみがよす
心つもうにきる／＼

あんじて霜うしはのよかくすへかわき草花
かづくえとたわくあおあがくととせれ奥をい草花
すりよさうら事ありてかまたも
よきかく道もかりとれどあれとひまわるを荒野

翁

すりのかりりかとうしー安我と書く通のやれ
がきうく見て／＼声せりきりト
わき氣く何とかよす而されととくあやめく

ゆ

升すむ思ひあトしはの別ハシキシうと
いとせんすすとくトかねるよ土山くよにくう宇は山前長
よき其よれ興よしきわき形神とくくわく見
きのよとよとよみけはながおのとく取見てハシキ
あれとえくすきにとくらうとくよとくだらす見
せきわの今ととなトくら川あられとせせり理才
名うち川れ千れ浪よあられとあく見えとせせ織
思やし黒のまトとくいよと我れ此方よとくゆうよと
もあむ里空トよ中だと今やれと見えとまくえ
うれ今りうれぬ事トよ

まよす旦トとすすねトかとくは浪もあすり

ゆ

うれを心とがくらまトンの風トよまれまトりや

寢のあよとし

はやまといにふをすくとみえかよもの興らえん
すきりありしものあらわせまちとまづらふれ立
やうひの里とさととさうれしたれはとくに坐ゆ下
きえかげ匂とえよろしておきしむきとくとく

ときと不^ト分別し今

はよもたのよもたてわれ立一まじりやくとくとく
ある立しうきし風とくとくよ里とくわるのよもと
里とくとくやそりきる奥一空へ入ひの乃と
人めりてとく通とねうりやそもしひとくり、傳
誰とくあらわしと玉のとよましりて物とを半すり
むとくとく名のよもとやう川我キよとくとく良とく
とくわいとけんとけんとけんとけんとけんとけん
けいじ事とありてよやかとせむとくの年とくとく
ちとくつてよそ

浦とたまよろりとくとく立くとくとく

今からだまよきよしの山^山現にと書たとえ
さとすくとすくわらぬ現のうれゆびとくとく發
あいとくわいとくとくとくとくとくとくとくとく

ひくと書絶たらく

いとせんありし別とせりにてはせすくとくかくとくは
えりいとくとくよくとて三りまくとくわくとくの浦の風
波せくじうきとくあまきれくとくわくとく事もと
立とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

山と端よまくとてりく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

き代りあらうまよ。心事あかへき今すが、
いはぬ立ちあまむとたくもしげせをうめやねせも
あすみせんじるまとすむと有教いとるよき
えもーし轉ふよんじんとくとくまよりあはれ旦なすと
あはれノハヤモリ神の御の事
面おのめよと神乃白ゆだよのえよあひくふ
おもひゆる春の衣乃とんましいぬえいを千葉ももて
おとくへと豈へりとわすれ、たゆきをもと日とくすくん
まほんと與へりとわすれ、たゆきをもと日とくすくん
かくしよとれ橋の上まもひやうしたとあまよせ
行ひゆりも今、かくして同世とだよ別すれ

雜
稿

えもすばねれやすく用うじよすとくはの能
空船草秋稿

我ふ、峯れ原三月、さうれ私のゆゑ
建暦三年八月内裏哥合山曉月

やと月衣てよ。様花だいやのうせのふれいふ

河朝霧

朝用ひと浪も霧こそ里とひよまきとま

達仁三年秋和茶テ合署中暮

たちまよ雲れそよめ空くふ煙とのうへすま

山家ね

ほれくとあらうくみぬ風もととかく人ひ心よ

正治元年冬左也九十七首二合署中曉月

いづこより今やととまくとく日もゆくの峯れ

同二年正月同寄す。左伏櫟

ナリ。左ノまみをつまう中へよ。おとせ山乃え。氣氣

建仁ニテ。三首言育猿

神。ナリ。さる。だい。と。猿。ナカ。し。猿。ナカ。す。り。か。猿。

建永え年秋和哥暮山雲兔尾

あたそ。こ。れ。山。を。た。く。と。見。ゆ。へ。室。の。く。も。

建保右大ヤ家哥答四轍中れ

を。し。ね。れ。れ。移。ひ。る。や。ま。す。ね。を。山。里。や。と。移。

移改石詩哥合四轍中映燈

秋の日乃。う。れ。ふ。風。だ。ら。れ。行。く。ま。わ。と。白。雲。

り。わ。や。み。い。く。む。け。の。か。と。し。り。立。ト。き。方。れ。移。燈。

建仁え年正月ハ憐哥合猿宿聞

左。ナ。リ。ナ。キ。セ。シ。を。嶺。の。嵐。カリ。猿。乃。山。の。鳥。ナ。キ。ア。

か。な。早。さ。つ。モ。ひ。そ。わ。く。リ。

子。を。左。心。や。雪。す。ま。よ。う。山。の。わ。く。の。と。鳥。よ。々。そ。り。

三。す。い。れ。ミ。一。と。い。レ。ク。ナ。リ。と。今。ま。く。う。る。鳥。す。ふ。

ナ。リ。し。絆。ナ。風。の。人。様。れ。都。の。ナ。リ。日。は。ん。も。

ナ。の。よ。と。だ。ナ。リ。い。い。さ。と。よ。く。雪。す。ま。く。り。移。れ。ト。ひ。

建久七年内大ヤ石。行。文。字。と。上。よ。と。き。セ

首。の。あ。よ。と。一。中。ナ。だ。ひ。の。み。う。

谷。れ。あ。峯。立。雲。と。と。下。て。ま。く。ゆ。く。の。れ。乃。移。風。

い。す。れ。山。と。海。と。あ。み。あ。み。え。春。う。秋。よ。か。ぐ。月。秋。

行。す。草。の。名。を。と。宿。の。月。あ。れ。や。風。や。こ。う。と。え。

都。ナ。リ。雲。れ。す。と。り。ナ。ま。の。と。山。の。く。と。や。え。ま。ね。

與あきよれとさうせ下乃比すも事あたてう

ね尾哥合山家シ

方いひひてすひきすのうをとすらる様とむえ

内裏哥合山ナル

鐘の音とねよ吹く木風妻木やむに海の穴

野曉月

うちひひくわうかのすくよああうそく有ゆ月

内トウリムクテテノ署牛

うこそとくあふみよとへせこよひとうし皇の

楓白

かられたれ都とまのえり興し日の神よとす
水せ漸れの山乃人のゆ不けくれてのちま
けく地也うきりうきてまちほくとも清光朝霞のゆ
れいや月は水よがくめられひすらが草もされち

述懷

達久五年亥左大將軍主述懷 は田杜

君へいをうらうきたのねのうだ一もうしたじんと

述懷三首達久五年秋書

君代わらず、後と玉のとれたりまくへ行まく

我見えしみよれ始へれの月年へよけりとれ行

思とくあれひすれきの草志ととだりしがまよ

義元二年九月具親朝たハ播磨を尋すつま

「中へくとくとくとく」

せく袖ひづれの時ねほんすれすつ竹をもぬ

れ風よ浦もきりすくや形音もりれ奉れ月け

同五年九月栗里の多々天晴候儀 宿海朝

和琴の浦やあらわもれどいくぐらひの見る者

だのう

寄山暮

里のわざりにましむわゆるとくつまむとほき
月以ああああああああああああああああ

えりけのわやれいまくはもじきにきよと通のよ

承元二年六月住吉哥合寄難山

ゆすと力ありとましるし見えとと道ある代ト道まよ

松尾哥合社ハ難

おおきや我ツの方、おおきや我ツの方、おおきや我ツの方

達磨三年五月内裏哥合干時三位侍役

寄亂難

きすれ今、古歌風のよがりうてをもとと

三宮十五首難

まえの比、しゆうじゆう古今とたまうるがまえ

あせ奥よ

なきせんせられ埋木くらりく又たあれわやのくし
てふえぢんまりりへ翁のとく人の生もじや里まく

おきえとれよと仁和寺の宮トまよすとそ

年よれゆのよなれよと意よのこよのえやあ

秉久三年内ドリメまよ・述懐哥

神モトアリし道のじゆ水しそひそとね糸やた南

る家え能」だち春加賀申とも兵庫ハ家長

じつけ竹

子と學よき法のよそよもきの衣れ一ふり

ゆきまへきト「九氣クメはまくハ

や

家長

道を早めひのえれかよれは一ト不レ思レシヘキ

えれすひ効侍ハシキ

京官除目ハシメにてよ下崩參議有く納言
舜進ありへきドリきこーに三位と申セ

清範朝モツモト行

雪肉ハシメされねたるをされおハシマサニ也

人のトロツヒハナムテのタシル仕ナシ

建久六年勅位ハシメアサヒナホリ太朝モ左衛門督

隆房

久行ハシメト島の松ラリ御まつさす小毛

西一

千鳥ハシメ竹のよ比引と友よよまう山風

四置ハシメて後临时祭日越中侍従兼人臣て内と

あべの三元ハシメそゆる多幸ハシメ神乃名残ハシメと

小侍従ハシメアリ人乃ひよりりいたれまかく言付

やどりと申エハ其人のがへきとしつギ

死モキセヨクスムハシメカシマモテヨミキモコスム

侍従

またかくミル我ハシメアリテシモトモ神乃名残ハシメと

西行上人ハシメアリモヒ哥合ハシメと申て判すへきドリ

申ミとソヘアシカウカラサケセタヒ

クシジハシメトアリシヨ申シヨフ故侍ハシメハカキ

アソツラスモトキスモ

山あはれもキヤス君莫與ハシメジモトナリ也

西一

上人

じもひすまたよだれよくて山川のあ

又

神ちや松の梢よがくら藤の花さとすと里もやし
みや

おちふる心のまごん下葉の藤よおとひしけを
こ申一送ア仰せが候よりうてある年
早啟ありてのそひやまきア四位とおなき
奉られたらわいといまいよまくへきア作
と仰へやもんづきぬし

さてといふ

やれみ山の月乃つけ

ほはるやし

そしめり

よけうとがざれと

きをさせと

ますま

ひと不せく

えしもと

ちり葉

こゑあれ

みやま方

すます

おと心と

道よまみて

立望れ浦

わだれ

神のすと

をりおと

ひしゆ

かくよされ

せひるや

春は鳥

じよくと

ねよりて

奉はれ

すみづく

むしゆ

きくね

おもひ

おひり

立り都

よやすひて

のうれは乃

花乃香と
ねとたま
すくとく
のとからそ
花のぬく
そくめも
かす川
ひきとり
がむすへき
すとく
兄弟

にうちなし わまめまにかせやとす
月をれば きみのとゆまめあら 実嘗風代
あきても しもしくまわゆますと ミ川の行浪
たちうり えゆれやと そろくつき 曰吾れミけ
のとふそ 和氣浦や いともよきす ほれより ゆうどえのを
ねくと 王といふんじうの代と 千代とまよえ
えんとと 今と玉しと がきつうそ なむかみに
ソシケリ 我道またとだせずも えんそくの
後とく ふくふくまく

まだりひよくへたのびうんだを、まくとて山川の水
建保五年五月佛堂にて二首寄る山朝

けさんこころ山のりあらじら山をせぬ道のりとたて

無常

きよしの元母の里よすり仰よすも

大痛

いふるのせじゆとひくえきをよれとくや

かず

さへ方をす今もちうとにくふと定むきと

同三月廿日大将れうり

春霞

くー空は石残さくまとがきりれ別れきり

れやし

別

えひしがれは重きそきての春ハ久々

もとまとわかれわざとをもと月日とてしむ

やー

月日へて去はるむれのをまわりも事よりぬまけむ

秋野むせ一日五六条へまわりてがめうるとて
玉あらぬあら海とさくまするキスヘあらやこれれれ、れ、れ

ゆし 八道

れよきり風のすくいがくにと波の病え主のうちち
三條中わなとくきりそのれもれ思ひてより井

だらぬ月盡日山庄主にこそそぞり

初霜はれの叶はやきりんへかくふれのくわ、ハ
そくらあまうニとせあゆみの霜まこと神の下ども

えびらわせのあくよもじ神もももきれのくわ白雲

すすこまてこくしん人まふよたじゆきれのくわ白雲

のまきてこれも昔よきりぬへー我のくわれと行

またきりとくさき長くれれのれとあきとあせそく
とやま田の病うりふのやらか君とだのまんいの妻乃、う

浦也

暮のれとがえてきすがへりとすアあうきう度の初霜
またとくれとえし旦一れすももがきわう霜乃だとと
われのよれふれふれとわく(ほく)くがよーもあつきれ空
人のせう霜よくとくうてわかれれもつらじとすれ
うち夜うろきん春に霞うきとくとれのくわ白雲
思ひうきのれ音とこ乃比不一りすとのもふ
よ、重とけきしとくわかれれ秋よどくをとす
太きハ風すもやだらうん林すすもくもれのくわ
のうりのとねとありやあれれのうすのさ、まくさくわくても有り
秋と冬とあらうり、またおまのだのじりと月よまく

えれまむじと奥へえをわれどだのうといて岩代のね

不^レし日女院大浦

まきぬれのまくろすくよんかわ／＼のまくろすく

ゆく

ほくとひづかうそし景づけの内と朧もすりけで

同年の雪れぬ大浦

鳥れどよの雪とまどそしあふねまとうそとつ那
いとせねへされり別れ朝日もよ雪れあま
いに春里やくもんを先下ふくへみれ雪らむし
まきまきあめくれ鳥のねの上だすしすつ雪下み
鶴のくろの行室の雪れえはせぬねひあまく

晴れ

夜キともそひに海まくれてがるどよの雪となれす

去年ハミみけのテルをすくへてまくにたけの雪
心りとこゆせぬうととくともやれ奥の雪とえゆ
達久えと二月ナテ西行上人おまくにきと

うち月の比ハみ室をれときしとく雪れゆとすれ
上人先年詠ふ林^ノハ花の主だん春^ノ前^ノ
うれまくまくのむく月の比今年ナテ日月

ゆく

紫のえをくじなぐもさきしとく雪のよしをす
故務政^ノよふに身アマサツれ事のあふ
日立山^ノアシヒツイタリ一みずれ次^ノ
叶^ノもかきだす^ノ根先一叶れ鳥の春の山風

ゆく

身にまかせの身とすが、もうやめときては

其後日教へて又あれど

桜花よともとさへ望みう乃もあは春日よなとお
春れ東のむらむ月夜とむりうけん鳥ととくわな亂
歌く波にれりとかれ春れ身アト内々被矣もかくし亂
思ひやる苔の下には鶯もく霞の谷れまわゆる
やまき方ア鷹の霞よきトリしむきく暮る春れ空が
りきりやとよせんソレ他よりよふじうそかきどほ
い流すてたれことたの杜のあきて行ふを志いせん
なまきうち命ハだれも書き物とせずとふ思ひと
きくねへしゑれ波のなきつせようたとこのわとをり

をす

立すよろをのすとがきくよのり煙としよよたまく
うきよすとすと車と今、白駕れわくとばわくしわくとまく
うれしわ玉のととのとまくおとまくひよしと見下す
霞行うた物よれ春の空くよしとよしとれがくえと
山くよせきよりあようるとよきまくとづるよ
春れ身のまくにまくアタう生田れ杜の私とく
せきよとわすれ心なきうちわとれ今下よくよもがよ
今身よ我身ひづれ旦川もとたまくも鶯のまく波
なまく比人のよくゆうせし

道うる煙のとてよ立うそ身くねあけくよと
尺とくじくの身とがいきけく然ふよだりにゆ
三笠山常き道いたのまくせのとくうとまく心身
あくまくもが。せよからくとくまく神のりしなさ
面えはまとがくととだくわすやととのまく

せ草、うきこよまきれ秋もそねすみれ別の草むと
さきたてくすりへと、すらりきだく黒毛がくはくと
朝あけゆるすのうれ世とすすえよりあをるに

同年れ文のいづやく

わきしり夜ののまのいましるくしゆくわくと
たくせよのうりんとくえし今とまきがも旦とほひ
の書とねとみ月日へそとまとされれ雪の空とだ事
黒きやすりしやまとひの書の文と花だらむがすくわ
とくえしなめとやけりとくみ春風へとくすを
じちけほのかのふきりしづん衣れぬかだれもなれと
思ふひり差残とだよりよのよとよやとくと
うたひてよし稍ハ青葉もと／自ハ左のとくにれき
いをうそつむけしわの草の舟とくまむにとせうる

十首清うれや

まきこむくせりハリしと志のくわきまくすらりしとくめ
けまくとくはくとゆよくまくらのせりとくとくと
とれてやすくとく月りかとくとくとくとくと
大方ハたむりぬ車れまくとくとくとくとくとくと
わくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
だのすくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
うからきやうひのとくとくとくとくとくとくとくと
神りれまとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
いえへどと我だらぬくとくとくとくとくとくとくと
達かえむとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
月日てれの草とくとくとくとくとくとくとくとくと

雨中無常

トモレがまひてりわきよしのあうとる神の上に鳴
六条三位家衡ノ人よどくとけくとまきて
送一

えじてよゑこりす別れね乃はと川よせくらん
さきやふ寒れぬひゆくみこよもれ鷹つて
西一

すぐれとなくともおつてもむれのひろ
これでもどこよそをりもれれ秋の別ハキヤカリきり
義え四年三月七日左大將右へ

えし 大将
すに行きよ宵とへとくもあく面乳のまもまれぬ
西一

浪あれ、まもれもみ、くせんくふにせす
君心の御
兼入え年六月故女院御忌月蓮華門院
まもれて是れ事とぞ情くしまりれたら
女房の年。

おほくはけた別ハキヤリて昔見し世人をくま
りもヘキハくい玉乃とよよき方ひゆの長樂院
今日とよ草葉の病とよやかなあとされまわるは
きまづりてよんへとがくいわや名義代形成能

川キ二日

老うくは思え空よ三しやまきよめく
里きやさはりがく。年くはくとまくねくとくもく
うくらだれだれえす。古やあくまきよ徑とくとくは

老毛龍居の後林へ比せれ風なり
かうり行なれまといひくはるもてゆる事より稍小
いふり私の東すきよしのうひきそこのうみわざと
病時神よさうりどくかよとや私ととえれ別うりうん
きえともいくもあみ私の日よううひまつ白菊に花
さきとすばやまくおちねをあすめ
霜のととの錦れ承とて、さりやよううと
むひやむれのあくまく都れ事もありと
まくわくまくまく雪れ往來下うみだの空を馬やま
大それ者としの神よとたうてれまよれ私乃處多
あり。此時の法事もとつてよ一方すす黒や。と
女院にてセリテ曲侍世とえしき行

すくなくともの承うだらうてはのまへしとぞ

神祇

後京極行政殿侍御勅使時か宮よりて
契あてき上宮川より下りてせまくもかけだのをも
じへ八幡哥合とも今のもとせむ
社事迷惑
すのじゆ雲外よ星といふをやすみうすれ
住吉并依羅社へ求子の哥トモ奉る(きは
正月
庚申)

住吉のねむわき浪よ、ゆゑぬけハ千代もかくし
ま代よとこれ社乃とくわねとねるよだへきへん
秉元二年秋少将貝親三社毛哥海すき

ト申中ト住吉

廣田
かきつゝねのーた浪多をぬきくいすりキリシミニシテ

廣田
われひとひたのくまゝりそも今、ひひきをすれ
海士のもし里れちへのいくとせしわらしたて、ミカタ
シミラと西しまと小野ト利申して
ちもやうち浦の小野ト後れて後さうか物や廻ん
され、トリキナリナリナリナリナリナリナリナリ

告也
見し事のよだのりくゆくよふ心よりお物なり
うとせとこせはまらのわれりかくてあらんやが南
かうへや。りやけきとくらきと神よませて你ともうにづ
れ

六首乃中 社弘松

ためう。あくしまいれほ淀よしまくねのル

湖上眺望

にうの海のあまゆすれよすらしてともへよきれにや
拂無野訪の山供よまびてえいづるまほりし

本官

寄社祝

ちもやうち浦のくまきの祭とまくみ千代のだり

河千鳥

さやうや千代と神やどよしきと川原よまがせ

山家月

ミホれかせうりかよくゆるしわよほり、夜

海色殘月

やひのゆといひうえゆあまむれあらふとやすと、
庭上冬菊

霜とお南の海乃濱いゝそくのゆれのまき
暁月竹風

わきよ行のま月かうまは志れ半ばきみよ

那智

深山

風乃とそよれりのすはもみづれにせせ

曉月

やくふ光よし魄の糸れちと夕くしゆ月乳

寺落葉

寺また紅葉のよとあたごと紅葉木に

暮月に良

めん心れきとにうれゆへすす川みれと

道れりのち山絶月

神の霜よまをしきよまをまをと見ゆけり

暁初雪

冬しげりに比雪とてむらかとこそたり奉はあけじ

海色冬月

きりきれ濱のまほくよ雪が半らひや冬が月

深山紅葉

みぢりすとよれあいやみのじゆゆきまつる

に色あま

もう秋とくねとだれいと川と良こゆふへりれそ

旅宿冬月

岩はりきは、いく様の、かとえりすら今

霧中霧

冬のあつて、あつて、あつて、ハ浪よ、いんよ、ね風

シ袖玉

神、やまの空す、ゆく、ミシタルの柳葉の

天教

後法性寺入道用白石舍利珠、詩哥結縁

ありへーとも十才是の心と相

あとさる此もよし空す、なにけと雲々、うらみをす

性

にうひや、川のちよ志はりととまこと、むー、だの月

解

まほせ、不岩向、良、ちくとをなめます、のり、うれ舟

作

春、山、いと、ほの山、いと、よ、ゆすへ、と、えよ、と、ち

因

種、春、春と、わざねは、まされや、かき、う、三、りよ、やまと桜

年と、て、子、月、よ、な、ま、ひ、小、ね、ひ、く、も、千、代、け、や、

果

神、の香、よ、と、え、し、板、し、あ、と、霜、が、と、じ、と

す、の、せ、と、ね、一、け、と、き、う、ま、と、え、す、け、き、む、は、の、煙、よ

本末究竟等

あまうや、う、ひ、よ、ま、き、な、と、ま、う、と、な、の、か、り、や、う

人よりさせ作化城喻品

比空とたゞはさあきと志りやまくね身無

報恩會五百弟子品

もこりと風吹もせりとく人もやくと

同會人記品

ぬまふ田あむ業のゆうれどもよしとく

大師勸告一不經は師不

すむかわよらん道えれい法乃花の病の下け

報恩會相收品

わうじれりこう玉すりやとくと南の空とて月乳

報恩會勸持品

殺されて行きてて月差とトミミと何意

涌出品

まひをほりごくわくすまもゆうはとくふな

三义十三年の忌日と遺言トがしほ哥よし今

すりて縁縁經供養一作一嚴王品

け道とあるとだのじあくあくはまよへしやまし今日に

律師獻因すく作一法華經普賢品

うちせよらうへんしにわきとやくまくあくとま

母乃國忌一法華經六部すくまきたてます

て供養す一部のへくはよしよくせ

一卷

わくし春ぬくとさすえわくよく育てうれ

二卷

おまよあはれをじゆくえも思ひき

三
卷

郭ムダツヨリ奉ヒミトハナカラ御ヤモシタニシテ

卷

卷

卷之三

卷之六

三
四

七
卷

卷八

晋劫の弘誓乃海に舟を生死のはれあくと

卷之三

普賢行

心經

むかへとよし佛のまゝやまと空もなげまよ

無量

生ニ歎テ共盡す(トノサムシテ)

解脫房の事と法華經大意

のりは花菊の朝夜やう見えりすす見るえどもあ

16
24

今
賛
久

金木言葉のね
まくせしむらの林の煙よそのすえ乃あれど

金光の寂勝王経は正論品を國內外人咸
盛蒙

利益

四方の事あやしむとせんそくせんそくせんそく
きく人の名どりくらべて車部は供養すを
人のもとめす哥 穀非宣所

二条后

高津内親王

本居宣長の下
そのままでし
かずとお

廣憐惠息心

、も、か、ま、と、す、ゆ、の、道、く、て、じ、せ、き、を、用、の、浦、

なまは別れぬとすまゝのうちかしむ

葉乃雪かくちやんすうに半のよし

寺の月夜よりかとすよやにてせ有の月
文治ノ比叡富院大師天王寺にて十首詩
よみがへり非人教を依上力入在奥

西を望みての玉ひづれの秋也

草庵忌酒

さうりいんくわしやうめはとまかたながき
曉天懷日

さうりいう、有の風ません昔すうてきまつ
首善觀方

きそそん煙のそとをひれ、うねとまつらの空
猿宿浪聲

だくわうとの枕すうち浪すよもかに袖ひるはせ
船中迷懷

あれきの舟てよたなしやすしやくが走りゆき
狀離穢土

にらはよきとましもわぬりよへし此生と
欣求淨土

右の機織扱ひ詠志

りのじと興がすすよがちのひふう、み
於難は精舍即事

土キモヘのりうしきときよにまきははの浦同
遁世のトキきて家長朝

墨染れ袖ひまとておひもじくせ

いもせよじくのいもじくせとまわ老の
右身附桜室八道

未いりまよ道の月のをとくせと今やまし
ゑし

やまとせせせせめとまわしてまへり
右身

是猶不足哥也後堅有耻

詠百首和哥

因沟早春

うとうせ代の友川をもゆくあい不じもひく

湖上朝霞

朝りあらすからすや八重鳥えやよまとととせ

霧障遠樹

三橋みゆきととかすしやせ川不あじと二り枝

齋中雨寫

宮古もととと山ちゆづり衣をく林ともかへ今のか

障家行學

山川のみうちくわかれつり竹林にいだる

野外殘雪

春日やいづの雪はまくそよすすいりゆきす

山鶴梅花

久も香とまくとてはくく梅花に翠玉のあきら山

梅董西

いわいうちれよましり梅くよくまゆ雲やうし

水色古柳

年月しうりよまく柳をもゆ川のすゑがま

野老西

たまよまくせやとれ鶯むらす半代ゆきの跡

遠峰山荘

冬まつましの雪やまうらもとくれ等のよみ

暁庭あれ

あくまくのとよまみくす風よけぬまくわざく

古シタ花

そよがわくをのひくとすくはまくまくまく

河上春月

わ春むかれてるやまの川霞のすよす月

深草鷹

春の東北ハよの鳥風きみたひてくわく

藤花隨風

松間乃とよだすさいくとくわくわく藤花とよもまく

橋色歎久

夏

印光庵翁

や花の枝したむれあどんよこわ道のじへがり

初夏時

せりと霞だつて、郭ふ又しらそまきまみゆく

山家部

こころ里はうらもとくわく時鳥山もくわくだつて

地朝早蒲

あくわくうよいくあやめあとよく宵をかねやく

用后蚊

こころとくわくしゑく

時事お行のととの奥のやうた

盧橘野

袖の香ひ花たらまのれとだに風をまわす

杜五言

ウリ合ひよだれやすれはくよてん年

野タニ草

あくのとやまきひだらしきにまつ

洞窟草

月影冬をもじてそくちりえと月

谷がちえうけ

夕立袖もさりてから衣かくさりゆき

秋物

秋風をよそしりゆきあけれ風かほりよ

国月七夕

天川上りき岩のむかわを重ね衣やまくわくえ

秋月にき曉草

あきやみ草のむき葉れいと月ひとうせ

山家初鷗

竹風の雲よすけ本てそよ山はりかくは

海上待月

あくの私見に衣とがくともいひとくいふ胸

松同日月

袖うてえやまくれ松ゆめいかなか月をま

詠と覧月

花うてえきそくみる草の月とやまとよ

草病昧月

じよのけみきそくみる草の月とよ

用絶惜月

あさひかすうえんとなまくら 実の月九月山口

鹿聲東友

山室乃竹とりうてをと友ハトモすく庶れきよよせ

田家林衣

病声かだそ山風すくよとくに衣ふせ

古波私夢

夕きうにとどひよひす川立つとも舟もありや

秋風はむ

え木かへこの下落も引くてもいふやまくや
い離下同生

紅葉寫り

山川乃時れてるくすく葉落ばれぬもく葉生

紅葉槿花

山中乃時れてるくすく葉落ばれぬもく葉生

川色菊花

大井川せきは浪の花のよとうちひすき山の花

獨情苦秋

まゝ人のとみしうれり草木にじうれ行け秋のあ

冬

初冬吟

きまくよきよ山風ととつれてゆき月九月金木焚

屋上向雲

またの至よあれのよときたひゆのゆくよゆく
霜理あま

朝霜のをの紅葉わね葉氣をひきくすけの

やくよはくよえんへすすれむまかへとをとまひ

古寺初雪

じへやまに山根のすすきとすまほもんはち初雪

海色ね雪

住吉のねやいりくとすまくとみもとまくとおだ

もと家畫

めのましまくしるく三落ひの入は月見乳

湖上千鳥

いのひは月まつ消のさ上千鳥うれ風とまく

寒水鳥

せせらうすねと風のさと東上鴨せせの霜

歲暮同

ぐくくもくくくくくくくくくくくくくくくくくく

感

初鳥緑立

思あそりうれ里人の事とくねむとくねくねや

同聲悉立

秋乃霜うなづく花の寒らむかきすよ生のすくね

恩親脇立

めももにいとそへえく業乃えれのへはま木きりと

彩ふ令立

ゆきうぬりうせとまのまに川うき事いねけり

様宿雷立

立田山本れおのまくわしれえすもやくてぬくわけ

無狀曉立

今更たゞくすれ山のやまもも晴まくはまくわ

雨書立

朝霧ハミカキアヒルヒツリ

逢不遇之

も人ハシハ中ノソトアキテモモロクシタニモ

與徑年立

秋けそぞもあはまいくつらひすまきれ

翁真偽立

たまとせのいじりて、あくしたましゆく葉れをれ

西車増立

ひちかのく煙くすりあく。思ひだすがこられ

被狀賊立

父キシムヒムモリモ桺たぬきと見せ

途中與立

うちのへみせて坐。ひきもと金せ

思て難解のか

日住心立

いだせんすのうと住にのまつにがて下草こまく

依慮祈立

さよあやめよと手向へてうれど、うるさき

借人名立

さりとれりうすひくと我がの方へたぬ極了

絶不立

あり草人れが一かとうりとたよとくと方

平恨絕立

そくやああきせきへひきだわ里せきのふくふ

暁更寢覺

あきやの多れ林すとく霜上寢覺うるむ
音言松風

えよかよゆるをのねゆへれどもよし
幽中縁行

父ノへお青年うけのよきづまもあん華
浪洗石苔

えやせ川さうほ段の白妙ト苔はりばれ
高山待月

ひれ山峯れ本林よ上原のきよく月と移れ
山中鶴の

雲よ花やられ山にさまれてよもわり、鶴の白玉
何より流青

秋のりきよ鶴川のゆきえみもじ下すり、
春秋里述

有の霞十霧とつをやのそろ林へ下れまよ
用鶴行客

り乃こくえもあくととあとよまかみの用鶴
山家ソ風

れども雪れ草木の宿よし生引そーの神子
家人稀

うとととよのうややくそんそとじんが谷れき
海鶴眺望

えよやそのた舟乃宿ひづれやー風かとの
月羈中友

夕れくよやとりうとまかくいくあるのとよし

旅宿にあ

様よゆゑやひのどうにゆきよもじて、花房

海色曉雲

あきわどこまうりにきいつる友舟の引はれまくしよ雲を

寄鳥無常

まめめいへんやくすくぬ鳥少の少とくよもえもあ

言草述懷

りそくひきすじらたりセモシカキテガタノ道のまむか

寄木述懷

このがまへのわくちやくさよもくらへ友公もてやまく

逐日懷旧

あま乃れあくひりよふ三のとくしの書たちと

社外況言

いりうじりゆとくしの書すの老あきかく民やすぐ

明治三十一年三月廿九日於京都
寺町通妓遊此竹苞樓主原水馬

翁年 十二月廿九日

仙臺 水原水馬

 110X
604
1